

1月8日

「あなたを知っている神」

エレミヤ 1:1-5

武安 宏樹 牧師

預言者エレミヤの召命は、南王国ヨシヤ王の改革着手とほぼ同時期です。この改革は無謀なエジプト迎撃と戦死に終わり、王を継いだエホアハズ以降、南王国の政治と信仰は周辺大国の干渉もあり、捕囚へ転落の一途を辿ります。もはや何を語れど絶望的状态にあつて、誰が好んで預言活動を行うでしょう。3つの語から主がいかにエレミヤを召されたか、契約の絆を確かめましょう。

①「知り～創造主の全知」

「知る」は神と人、男と女など個人的関係にも使いますが、「選ぶ」「認める」救いや特別な召しに永遠の昔から選ばれていた意味です(詩 139:/エペ 1:4)。あなたにしかできない使命があると言われたら、たしかに光栄であります、その反面で自分の何を知っているのかとの、ひねくれた疑いも沸いてきます。けれども私を一番知っているのは自分でも他人でもなく、創造主なる神です。弱さと罪深さをご存じの上で、主が責任を取られるなら素直に受けられます。

②「聖別し～聖霊の働き」

「聖別」とあるように、聖なる御用のために取り分けてくださる意味です。旧約では祭司や預言者、新約では弟子や使徒など職務的に用いられますが、主イエスは弟子たちが世から一線引かれつつ、神の所有権で世に遣わされて、聖霊が戦いの前線で働かれながら、罪 & 世 & サタンと対決する存在であると、解説しています(ヨハ 17:)。その過程での失敗は、聖別の不十分ゆえではなく、個人的きよめも働きの成熟も途上だということです。語りたくない相手にも、聖霊は口を炭火で語らせ、どこでどう語るか制御もして下さいます(20:9)。

③「定める～キリストの弟子として」

「定め」は「立て」(共同訳)とも訳されます。運命というと語弊がありますが、私たちのきよめの程度や働きの力強さ如何でなく、主が定められた働きです。預言者や使徒などの特別な職務の遂行に、苦しい時に支えるのが御言葉です。時にエリヤのような休息も必要ですが(Ⅰ列 19:)、逃げることはできません。使徒パウロは「私と苦しみをとものにしてください。」(Ⅱテモ 1:8)と言いました。私たちが立てられたのは、主イエスの福音宣教の労苦を共に担うためでした。

1月15日

「まだ若いと言うな」

エレミヤ 1:6-8

武安 宏樹 牧師

エレミヤは成人したての若者でした。一般的に若者に欠けているものは、社会性や感情表現やバランス感覚などで、信仰も年長者より未熟でしょう。若者の育成は骨が折れますが、次世代のキリスト者を育てる重要な働きです。「最近の若者は～」とこぼす私たちも、かつて同じ陰口を叩かれた若者でした。そんな彼らの語る言葉を裁かず耳を傾け、存在を喜ぶ心が求められています。若者エレミヤに何が語れるのか。誰が聴くのか。絶望して投げ出さないのか。周囲が心配する前に、彼自身そんな無謀なことは出来ないと思ったでしょう。モーセは賜物の欠如を(出4:10)、エレミヤは経験不足を理由に辞退しました。召命や預言者職に異議を唱えたのではなく、職責を果す自信がなかったのです。

①「知り～創造主の全知」

何故神は熟練者でなく若者を選ばれたのか。三つの命令が含まれています。

一つ目に経験不足を理由に逃げるなということ。若さゆえの特権もあります。経験が豊かになると、良くも悪くも余計なことをせずに打算的になります。ところが若者はそれがないので、何事も祈りと体当たりでぶつかっていきます。ダビデが石投げ一つで勝利したように、霊の世界は神との関係性が全てです。

二つ目に衣食住に欠いても遠隔地も、主の示しがあれば行けということです。パウロはコリント宣教で、知恵ではなく「御霊と御力の現れ」(Ⅰコリ2:)と証しました。召された地に足を運べば、実が乏しくとも主のお役に立てます。加えて大事なのが健康&体力で、これは若者が年長者より絶対的に有利です。

三つ目に格好いいメッセージよりも、主が語ることを語れということです。若者の言葉は荒削りで聴く者を苛立たせるでしょうが、それでも良いのです。宣教の本質は知識や準備ではなく、聖霊の働きに語る者が管となることです。駆け出しの教職や神学生や信徒を通して、何か教えられることがあります。

以上の根拠となるのは、「わたしはあなたとともにいる」との決め台詞です。主イエスの宣教命令も同じです(マタ28:20)。主の臨在は老若関係ありません。御言葉を語る者は聴衆を恐れてはなりません。人を恐れて語らぬなら殺すと、年長者が尻込みしそうな熱いメッセージに反応できるのも、若者の特権です。主を恐れるばかりに人間を恐れることを忘れる。これぞ宣教者の霊性でした。

1 月 22 日

「何にもまさる喜び」

使徒:16:24-34

渡邊 賢治 師

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。全家族がそろって神を信じたことを心から喜んだ。」(使徒 16:31、34)

クリスチャンの一番の喜びは主イエスを信じ救われたことです。その人は家族も救われてほしいと願いあかしをします。家族の中でひとりでも救われると大喜びです。今日の聖書箇所は看守と家族の救いの話です。彼らの救いは、宣教師パウロとシラスとの出会いからです。

●獄中の賛美(25) 宣教師たちは、獄屋の真っ暗な中で「神に祈りつつ賛美の歌を歌っている」(25)。神は絶望の中にあっても私たちとともにいてくださる。どのような状況でも神に感謝と賛美をする人は幸せな人である。「他の囚人たちも聞き入っていた。」神への信仰の姿はまわりにあかしされる。

●絶望の中で神は(26~30) 突然の大地震。だが宣教師たちは動じない。自害しようとした看守が宣教師に救いを求めた。「救われるためには何をしなければなりませんか」(30) と。神はしばしば困難を与えられてご自分の弱さを知らされ神ご自身を求めさせられる。「アメージンググレイス」の作者ジョンニュートンは大嵐で破船する中で「神よ、助けてください」と叫び求めた。神に助けられた彼は神を信じその驚くべき恵みを知った。

●救いは主イエス・キリストによって(31~33) 救いは、①聞くこと(32)「信仰は聞くことから」(ローマ 10:17) ②主イエスは救い主(1 コリント 15:3,4)キリストは「私たちの罪のために」死なれ葬られよみがえり生きておられる。③信じる者を救われる(31) 彼らは主を信じ「バプテスマを受けた。」そして、信じたことを全家族が「心から喜んで」いる。

(34)家内の家族は両親と 12 人全員が主イエスを信じ救われた。それは、母が信じたことから。しかし、父は猛反対。離婚になるかも知れない中で、牧師に会い聖書から創造者の神を知り自分の罪を知らされイエスさまを救い主と信じた。この父の救いは大きかった。「もし親父がイエスさまを信じていなかったら、(離婚していて)7人からはいいんだぞ。それに家族はバラバラになっていた。そう思うと親父が信仰を持ったことは本当感謝だよ。」(兄弟家族 50 名余の集まりで長男が話したことば)

1 月 29 日

「帯を締めよ。立ち上がれ。」

エレミヤ 1:17-19

武安 宏樹 牧師

「今」「きょう」と預言の喫緊を訴えた主は、言葉遊びで一旦肩の力を抜かせ、それから戦慄の本题を語ります(9-16 節)。帯は緩めて締めると力が漲ります。パウロ曰く「真理の帯」(エペ 6:14)は心の真実、神との関係の点検を求めます。必要性&動機&消耗を見直し、締め直すことで新たな戦いが可能になります。

どのように帯を締めればよいか。20 年ぶりに日本人横綱が誕生しましたが、大関とは立場も周囲の見方も全く異なります。まわしを使い古しでなく新調、土俵入り用の綱を部屋の若衆総出で打ち、後援会に新たな化粧回しを贈られ、安易に土俵際で叩いたり投げたりと違う、力強い取り口を今後求められます。私たちが締め直すだけでなく新調して、心構えを新たにする霊性が大事です。新しい皮袋で新しい御霊を受ける。人間の器の大小はたかが知れていますが、「もっと器を持って来なさい」(Ⅱ列 4:6)収まらないうと垂れ流しで勿体無い。パウロは御霊に強められ、武具を身につけ、立ち上がる三段構成で(エペ 6:)、霊的戦いを語ります。座ったままや棒立ちではなく、前傾姿勢で踏み込む。相手に怯えていると変則攻撃に出ますが、主を恐れる者は正攻法で前に出る。奇をてらう言葉で攪乱でなく、「わたしがあなたに命じることをみな語れ。」命じられたことを語り尽くさず、命じていないことを語ると打ち碎かれます。語って敵に物笑いになる方が(20:8)、語らずに倒されるよりもいいでしょう。

「立ちなさい。さあ、行くのです。」(マコ 14:42)居眠りの失態を犯した弟子に主イエスは言われました。彼らは帯を締めても締め直しておらず倒されます。ユーフラテス川の岩の割れ目に隠した帯は、腐って何の役にも立たず(13:)、ペテロが殉教を預言されたように(ヨハ 21:)、真理の帯には締め方があります。若い時は自由奔放、しかし老境にさしかかり主に帯を締められ立たされる。それは聖霊の働きに委ねる人生です。エレミヤは若くして此処に入りました。世では不幸かも知れませんが(創 47:9)、主から与えられた新しい帯を締めて、一歩踏み出すと宣教の実は与えられ、私たちが主から最良の地で養われます。教会総会、今年の総括と今年の展望の時。帯を黙想し、立ち上がりましょう。

2月5日

「こわれた水ため」

エレミヤ 2:10-13

武安 宏樹 牧師

ひび割れた心、疲労・失望・悲嘆に沈む霊に潤いを与えるのが御言葉であり、聖霊のいやしです。この恵みをどのように&どれくらい受けてきたでしょう。冷蔵庫の賞味期限切れの腐った食物を、処分を恐れてドアを閉じて封印する。すると発酵しカビが増殖し開かずの間と化して、死後に引越業者が驚愕する。そうならないように気をつけるべきですが、心の内までも臭い物に蓋をして、優しく処理される方を信じられずに、放(ほか)る愚行を犯してはいないでしょうか。南王国の民が行った「二つの悪」(13節)について、考えてみたいと思います。

一つ目に「湧き水の泉であるわたしを捨てた」こと。第一戒にあるように、イスラエルの民は神から特別な愛を受け、全世界に祝福の管となる存在です。キリスト者も同様で、宣教の主は私たちを通して全世界に福音を伝えます。問題はアダム以来、主を悲しませる行為をした後、背を向ける罪性の存在で、律法違反を明るみに出しても赦されないと思い込む、神の愛への無知です。「わたしを捨てた」以前に、主は「湧き水の泉」なる性質を知ってほしかった。サマリヤの女に声をかけた主イエスの視点は、断罪的ではありませんでした。「知っていたなら、求めたことでしょう」(ヨハ 4:10)つまりまことの泉を知らず、きよめ、満たし、内住する方を知らぬ空しい歩みを、優しく労われたのです。主を知らぬばかりにいいいよ背を向けて、自分の泉を求めるのが罪なのです。

二つ目に「多くの、こわれた水ためを、自分たちのために掘った」ことです。無尽蔵の泉に対抗すべく、次から次へと八百万の神を求めるのが罪人です。割れた水ためから枯渇しないように、多数維持するのは骨の折れる作業です。水をいくら求めても割れ目が塞がる訳でもなく、使えば使うほど劣化します。民はいちおう神礼拝していましたが、生活や欲のため別の泉を所有していた。さもないと自分を維持できないと、神礼拝における限界を設定したからです。神を信じる生活と自分を信じる生活の並立こそ、神との関係の割れ目です。「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶこと」(WM 小教理 1)自分のためでなく、神の栄光を現すため献身する人生こそ、幸いだからです。神が誰よりもご存じなので、計画と賜物を知り満たされた人生となるのです。

2月12日

「耕地を開拓せよ」

エレミヤ 4:1-4

武安 宏樹 牧師

聖書に「農業」の語は無いですが、創造主は植物を人間が育て食すため与え、イスラエルは全体的に農業国と言えます。パレスチナは標高の起伏と雨量の差が激しく、10-11月の先の雨が土地を潤し、12-2月の冬の雨が水分を与え、3-4月の後の雨が穀物を実らせます。北でオリーブ、南でぶどうが栽培され、「耕地を開拓せよ」の御言葉は、季節も合わせて南の民に届いたことでしょう。せっかくの耕地が石やいばらで覆われ、雨が降っても芽を出さぬ放棄地同然。それは農夫が心から労せず、自分の偶像に頼っていることへの警告でした。

思い起こすのは、道端&岩地&いばら&良い地の主イエスのたとえ話です。いばらの中に蒔かれると、世の心遣いや富の惑わしや欲望で進路が塞がれる。これを「良い地＝耕地」に変えるために、踏むべき段階があると思わされます。

一つ目に、いばらや岩を除かないと地表が見えないし、雑草も抜くことです。最初に偶像礼拝や不品行の罪を徹底的に悔い改めれば、それで終わりではなく、継続的なメンテナンスが必要です。根こぎにした罪が、再び首をもたげます。全的聖化&第二の転機&悪霊追放など試すも、疲弊して信仰が苦役と化します。

二つ目に、罪を除くだけでなく地を耕すことです。常に喜び&祈り&感謝する。根底にこういう楽しい労働があると、信仰が明るくなる。聖化は漸進的です。そういう生活を送ると、罪から離され、霊の見分けも出来るようになります。耕された心に単なる知識に過ぎなかった聖書が、生きた御言葉となるのです。

三つ目に、先行して恵みの雨が降ることです。まことの農夫が種を蒔きます。段取りの彼方に雨が降るのでなく、雨に合わせて働いて農夫が段取りします。「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。」(ヨハ 15:1-2)人の努力で石を除き地を耕すようで、神の御手が雨を降らせ働いてくださる。

キリスト者は、父なる神につながるぶどうの木として剪定されるのです。私たちの手の業では刈り込み足りなくても、匠の手で気がつかない所まで、それも人格全体＝聖霊の実と、教会全体＝聖霊の賜物の、両バランスを整え、ぶどう園は神と私たちの共同経営となります。耕地を開拓すると分かります。自分の成長とミニストリーの成長が連動し、豊かな収穫を期待できるのです。

2月19日

「偽りの平安」

エレミヤ 6:10-15

武安 宏樹 牧師

聖職者たちが「平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。」(14 節)原語シャローム＝「平安」「平和」「健全」「繁栄」の意味で、内面から社会的にも信仰生活の祝福を広義で表します。私たちも同じく「祝福ありますように！」「God bless you」(新聖歌 198)と互いに挨拶し、失意や別離に励まし合います。けれども天の神が見下ろせば、みな耳を塞いでシャロームを濫用している、第三戒違反です。新改訳でイザヤ書は「平和」、本書は「平安」と多くは訳され、南王国の中期と末期の違いを思いますが、エレミヤの時代はみな不安でした。罪人は不安に際して主を求めずに、手当たり次第に卑近な平安をかき集めて、肉の性質は肥大化し霊性が圧迫、シャロームと自己暗示をかける悪循環です。

この語の登場箇所を総合すれば、本書はシャローム論争＝平安問答です。捕囚に転落間近の民を主に向かわせずに、人間的な慰めといやしを乱発して、主から遠ざけた彼らの罪は重いですが、主はシャローム全面禁止令ではなく、一時禁止令を出して、捕囚を通して民が碎かれ真の平安を教えようとしています。かくて亡国の民となり、「この地は 70 年が満ちるまで安息を得た」(Ⅱ歴 36:21)お世辞にも平和でも平安でも健全でも繁栄でもない時に、主の平安が訪れた。シャロームがあり得ない状況で、人知をはるかに超えたシャロームが来ます。「ねたむ神」(出 20:5)は、ご自分が締め出されて祝福し合うのが許せなかった。主を知らぬ異邦人ならともかく、主の民ゆえに敢えて教育刑を施したのです。

それではお気楽に「シャローム！」は控えるべきかと言えば、そうではなく、自分の思いからか、主の思いからか、吟味しながら使用すれば良いでしょう。私たちのために、「シャローム許可証」を取って来られた方がいるからです。「彼への懲らしめが、私たちに平安をもたらし」(イザ 53:5)「平安があなたがたにあるように」(ヨハ 20:19)苦難のしもべ、十字架で死なれた復活の主の姿です。それを目にする時に私たちは言葉を失い、偽りの平安の濫用を悔い改めます。続く「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします」とは、主がシャロームの宣言者として、私たちを罪深い世の中に派遣することです。十二弟子は殉教や流刑を喜んで受けた。主と共に真の平安があったからです。

2月26日

「公義を行え」

エレミヤ 7:1-7

武安 宏樹 牧師

「公義」は「さばき」とも訳され、天の神が地上に義の御手によってもたらす、公平な取り扱いの意です。エレミヤの神殿攻撃説教として有名な箇所ですが、「これは主の宮、主の宮、主の宮だ」(4節)と3度繰り返して信じ込ませるのは、そのことと公義を行わないことはどう関係するか、考えてみたいと思います。ソロモンは神殿奉献に際し栄光の顕現と共に、後代まで求心力を願いました。それは南王国末期までも語り継がれ、神殿はパワースポットと目されていた。むろん神殿の偶像化は間違いですが、偽預言者のこの扇動は何故でしょうか。「主の宮回帰」と言えば、ヨシヤ宗教改革の延長でリバイバル運動にも見える。歴代信仰者の祈りが蓄積されたこの場に来れば、誰でも奇蹟が起きると囁く。

一つ目の問題は偽預言者が扇動しながら、礼拝の本質を語らないことです。ソロモンは建築目的が主のためであり、御本尊は契約の箱だと宣言しました。御言葉の真実を語ろうとしないのは、彼らも拘束されるのが嫌だからでした。不安な時代は民の思考が弱り、霊的主体的信仰でなく感覚的即答で迫ります。

二つ目の問題は神殿に民の意識を集めて、権威主義を企てていることです。一極集中で宮の維持管理に人・献金・宿泊・飲食・歓楽など経済循環が作用し、聖職者が旗振り役で、行政が結託して富を吸い上げると、権力者が潤います。主イエスが宮きよめで商人を追い出したのは、宮で食べる経済の破壊です。

三つ目の問題は以上総合すれば、必然的に社会的弱者への配慮が失われて、弱肉強食社会になることです(申24:19-21)。規制緩和でルールがなくなれば、弱者の分け前が取り上げられ、権力者が経済的かつ精神的に支配が可能です。在留異国人や孤児や寡婦をいくら保護しても、彼らの利益につながりません。

南王国の没落とわが国の歪みは本質的に同じで、政教一致の権威主義です。宗教者の試金石は、利益を顧みず弱者も主の民として愛し公義を行うかです。エレミヤはダビデ契約の神殿中心から、シナイ契約の律法中心に戻そうとし、二枚の板は十戒前半の宗教的規定、後半の社会的規定から構成することから、神との関係に支障あれば、当然人との関係で公義を行い得ないと分かります。私たちは彼らのように内向きでなく、神を愛し人に仕える者となりましょう。

3月5日

「涙の泉」

エレミヤ 8:21-9:1

武安 宏樹 牧師

「涙の預言者」エレミヤの泣く箇所は多いですが、本日の箇所の珍しいのは、南王国の民に対してではなく、祭司のように彼らの側に立って泣くことです。神と人の狭間に立つ預言者にモーセを連想しますが、民を叱咤激励しながら、怒りと憐れみは頻出しリーダーシップを発揮するも、涙の記述はありません。対するエレミヤは民の不信仰に、絶望感&孤独感&空虚感を味わいながらも、共に傷ついています。「傷」は「打ち砕き」「破滅」とも訳されています(共同訳)。乳香は煙で病をいやし、東方の博士たちが献上した最上の捧げ物で(マタ 2:11)、医者 は傷口を縫合し薬を塗布しますが、これらは罪の苦しみには無力でした。エレミヤの預言活動は何だったのか。悔い改めの実 無くば無意味だったのか。私たちも心の傷や不安に対して、祈りと御言葉から克服しようと努めますが、果てに行き着くのは疲労感です。しかし彼が見出したのは想定外の泉でした。プールの底に亀裂が走るように、罪人に寄り添い滝のような涙を流しました。

生理学的に見ても、泣くことでストレスの解消が研究結果となっています。しかしエレミヤの涙はそんな次元でなく、傷を負った民全体を背負う涙です。一日中泉のように垂れ流す涙でしか、悲惨な世情を表現できなかったのです。そんなことで何の役に立つのか。南王国はバビロン捕囚を免れたでしょうか。彼は目に見える功績でなく、涙をもつて天地を結ぶ者の存在を証しました。主イエスはマルタ&マリヤの兄弟ラザロの死に、涙を流しました(ヨハ 11:35)。それは人情や神の子の葛藤ではなく、死と復活を成就される方の涙でした。エレミヤの涙はキリストに(ヘブ 5:7)、そして使徒へつながります(ヒリ 3:18)。私たちも聖霊のうめきで、救われぬ同胞や横暴な権力者のため とりなします。泣いて笑う感情表現が信仰の現れではありませんが、感情も神の作品です。涙を流して天を見上げるのも、御言葉を語ると同じように大事なことです。プライドや社会的価値観で縛られた感情が、聖霊により溶かされていきます。悲しみも有限であり、主の再臨に伴う救いの完成の日に終わります(黙 21:)。私たちは肉の弱さ、癒されぬ傷、思うように救われない現状を嘆く者ですが、乳香や医者 の対症療法にまさって、人に寄り添い泣かれる方を覚えましょう。

3月12日

「主にあって歩む」

コロサイ 2:6-7

佐藤 紀子 師

コロサイの教会は、パウロのエペソでの働きによってキリスト者になった、エパfrasによって福音が伝えられました。この教会に偽りの教えが入り込んできたのです。エパfrasはその事をパウロに報告し、パウロは偽りの教えに積極的に戦うように勧めています。

①「あなたがたは、このように主キリストイエスを受け入れたのですから」

私たちの信仰の出発点

迫害者サウロはイエス様に出会い、使徒パウロとして出発しました。この時がパウロの出発点になります。そしてこの歩みは一生を変えるものです。私たちにも出発点があります。その出発点を時々、確認することが大切です。

②「彼にあって歩みなさい」

信仰生活は「歩む」という実践が必要です。歩みなさいと言われる「道」とは、

- 1) 天国に行く道・・・行き先は決まっています。そしてイエス様を信じて、その歩みを継続することによって一步一步天国に近づきます。
- 2) 喜びと平安の道・・・どうして、何故、いつまでという不安が私たちにはあります。しかしその中で神様に支配されていることを知ることは喜びにつながることもあります。
- 3) 勝利の道・・・神様に従う選択をすることによって罪が許され、勝利の道が与えられます。
- 4) 奉仕の道・・・キリストのからだの一部としてからだを立てあげるために奉仕も必要です。
- 5) 安全な道

キリストの中に根ざす・・・霊的養分が与えられ、成長すること

キリストにあって建てられる・・・土台はイエス・キリスト

教えられたとおり信仰を堅くする・・・信仰は堅く信じて、守ること。

あふれるばかり感謝する・・・感謝することは霊的に健康であると言えます。神様の恵みに感謝し、応答することが大切です。

パウロはコロサイの教会の安定した信仰生活を願い、キリストに根ざし、建てられ、教えられたとおり信仰を堅くし、そして感謝しなさいと、実践を勧めています。今朝、私たちにもイエスさまが求めておられることです。

3月19日

「主が声を出すと」

エレミヤ 10:11－13

武安 宏樹 牧師

① 偽りの神々の滅亡(11節)

本書で唯一アラム語で記され、偶像や悪霊に対抗する宣言と考えられます。これで戦いに挑む前に覚えるべきは、主なる神以外に神無く、救いも無く、公正なさばきも無しと、まずは創造主の御性質を賛美することです(6-7 節)。主を誇る者は、己の知恵・力・富に誇りを持つ者と対置されますが(9:23-24)、決して弱い者ではなく、主が必要に応じて与えてくださることを確信します。己を誇る者は、エゴイズム・神秘的知識・拝金主義・権力崇拜へと堕していき、表向きは主を礼拝してはいても、心では神々に仕える分裂的靈性に陥ります。では私たちは彼らを笑えるかと言えば、大して変わることはない罪の性質です。されどこの謙虚さから初めて、「♪天と地を造らぬ神々は～」と賛美できます。

② 創造主の力と知恵(12節)

いかなる神々も人々も出来ないことは、神が無から有を創造されることで、悪魔は神の持つ生活権・霊的主導権・世界統治権を、主イエスを通し奪おうと、誘惑しました。それは主と民の確固たる契約関係に、妬みを燃やすからです。ヨブが問われたのは「神＝創造主、人＝被造物」の一線の知識でした(ヨブ 38:)。理不尽な試練は何故かと神に迫るヨブは、三友人に反論しながら雄弁は増し、心中はあたかも神の三位一体に割り込むか、さもなくば同席を求めました。つまりヨブは一方で神に近づき、他方で悪魔に魂を売り渡す瀬戸際にあって、滅びの淵から神は叱り救われました。逆に主イエスは天地創造に参画するも、神になる誘惑を拒否し、人間の側からこの一線を尊ぶ者の範を示されました。

③ 御手を動かされる主(13節)

創造の御業は造ってオシマイではなく、摂理の御手で動かされることです。荒野を旅し試練を通れども、自然も時間も動かして折に適う恵みを与えます。金銀で造り据え付けられ、ものも言えず歩けない神々は何の力もありません。にもかかわらず人の願望や怨念を偶像化し、耳を塞ぐ者は何と空しいことか。御手が動くから私たちも奉仕します。心の奥から御声の胎動が聞こえますか。渇いた心に恵みの雨が、稲妻のように喜怒哀楽が、心地よい風が感じますか。自分と偶像を手放し、創造主への賛美と温もりと御手の動きを感じましょう。

3月26日

「言葉と心の距離感」

エレミヤ 12:1-4

武安 宏樹 牧師

ヨブは私人としての苦難、エレミヤは公人としての葛藤が描かれますが、二人とも一致しているのは、神が全知全能であり完全に正しいと認めつつ、神について分かっているようで分かっていないとの、矛盾に苦しんでいます。神義論＝神が何故悪人を栄えさせ、義人を苦しめるかという表裏の主題です。私たちも神を信じつつ、何故こんな目に遭うのか理解不能なことがあります。1～2節はエレミヤから神へのイチャモンですが、二つの見方が可能です。

一つ目に神の御業にイチャモンつけるなど論外で、摂理の御手に委ねよと、神の栄光や神学的妥当性を重んじる見方があります。神の摂理については、エレミヤもヨブも三友人も知っていますが、自分のことばかり考えていると、知識だけで体験できません。一つ一つ声に出して感謝しなければなりません。すると思うようにならない現状への不平不満が、的外れだったと分かります。

二つ目に神の御業にイチャモンつけても、一生懸命祈って御心を求めれば、神が優しい父のように耳を傾け、諭されつつ道が開かれるという見方です。全知全能と正義を認めつつ、それでも分からないからなりふり構わず求める。思うようにならないと不貞腐れる態度も(ヨナ 4:)、人とは違い神はなだめつつ、ニネベの12万の民はどうすると、想定外の救霊の情熱を教えられたりします。

そういうわけで一つ目の見方も、二つ目の見方も、両立しうと言えます。エレミヤは悪人どもが政界でも宗教界でも、のさばっていることが許せない。彼らは言葉と心が乖離し、自分の心は神と一体だと主張しかけたところで、御霊の働きか、彼自身も心は神と一体どころか彼らと大差ないと悟ったゆえ、むしろ高ぶろうとする心を、主がとく調べられ吟味されるように願うのです。涙の泉の箇所では、祭司のように民の側に立って共に傷つきましたが(9:1)、今回は神と一体に断罪を試みるも、同胞から離れないことを祈りで学びます。ダビデの詩139篇も最後に自分の心の間に光を当てる、同じ心境でしょう。私たちは試練や不条理に直面して祈られる時に、自分の存在が揺さぶられ、生々しい祈りとなり、へりくだられ、神のような自分から我に帰ります。その深い祈りで目に見える状況が不変でも、心は聖霊の刷新を受けています。

4月2日

「いやしがたい傷」

エレミヤ 14:19-22

武安 宏樹 牧師

本章で7～9節と19～22節の哀歌を比べると、前者は契約証書を盾に迫り、後者は主の栄光に喰ってかかる。傷ついた心は激情となってより昂揚します。心の傷は人を傷つけたり、偏屈になったり、罪を犯したりと、反応が出ます。偶像礼拝もその一つです。ここでエレミヤは信仰者の特権で主にぶつけます。私たちは自分本位でいやしを求めますが、彼は主に降伏しいやしを求めます。加えて祖先の罪も認めます。ここまでして赦さず、いやさないのは驚きです。御言葉の約束に反していると言いたくなりますが(Ⅱ歴 7:14)、そうではない。彼は個人的ではなく、民の罪を背負うから痛む。それは主の痛みなのです。

「わたしは主、あなたをいやす者」(出 15:26)主なる神は生死の主権者です。この原語が最初に登場するのは、アビメレクがサラの偽装発覚後に返して、彼の家庭がいやされたことで、その前提は罪や不健全な関係だと分かります。直後のイサク誕生は、いやしは時宜にあって神主導であると教えます(伝 3:)。どんなにエレミヤが望んでも、主と民の和解なしにはいやしが来ないのです。その暗く長い道のりはどれほどだったか。彼は後の時代を待ち望みました。私たちが恵まれているのは、聖書の出来事からキリストの生涯を知ること、公生涯でいやしの奉仕を行い、最後に死をもって神の怒りが宥められました。

「汝らは彼の傷によりて癒されたり」(Ⅰペテ 2:24)誰もなし得ない功績です。パウロはいやされずとも、弱さにキリストが働かれたら喜びます(Ⅱコリ 12:9)。過去に主が苦しまれ、未来に主は再臨し、その間に私たち教会の役割があり、傷ついた世の中にいやしを運ぶのは、私たちに賜物を注いだ聖霊の働きです。新約の原語では神と人に奉仕する意もあり、名詞だとしてもべの意になります。

英語だと片仮名で頻出する「セラピー」で、特定の治療法を思い浮かべますが、キリストを模範として神と人に仕えること自体が、いやしを与えることです。塩はいやしをもたらしますから(マタ 5:13)、私たちの存在自体がいやしです。内憂外患と代々の信仰者は戦い、エレミヤは遠望し、マラキも預言しました。私たちには主イエスが獲得してくださった、いやしの翼があります(マラ 4:2)。

4月9日

「教会は救いの要」

マタイ 18:15－20

田村 昭二 師

始めにイエス様は罪を犯した者の対処を最終的に教会へ委ねています。

今朝は、18～20節を中心に、教会の権威、救いの鍵、使命について見ます。

1、教会の権威:18節 イエス様は、ここで、人が天国に入れるか、入れないかの権限を「地域の教会」に委ねています。しかし、これは教会が権威を振りかざすためではなく、十字架の赦しとその喜びをイエス様と共に体験するためです。

* 私たちは、それを体験し、喜びに満たされているでしょうか。

2、教会による救い:19節 イエス様は「心をつにして祈る」ことを勧めます。その中心は教会内外の「罪に苦しむ人々が、滅びから救われるように」という、執り成しの祈りです。教会員の私たちは人々の救いの鍵を握っているのです。

* 私たちは、教会の祈りの積み重ねの実です。今は私たちが祈る時です。

3、教会の使命:20節 イエス様は教会にご自身がご臨在することを約束します。これは、真のクリスチャンがどこかで地上の教会とのつながりを持っている、ということを意味します。そして、そのつながりこそが、教会に与えられた使命の実です。マタイ 28:19。

* 私たちは、世に対して、使命を感じて生きているでしょうか。

まとめ:教会は救いの要です。扇の要の働きは、風を作り出す扇を広げて、その恵みを世に送り出す使命を負っています。教会も、キリストの十字架の救い、という恵みを教会内に留めるのではなく、要となって、世界に送り出す使命を負っているのです。その教会を構成しているのが私たち一人ひとりです。

4月16日

「復活に金で抵抗する人々」

マタイ 28:11-15

武安 宏樹 牧師

四福音書中マタイのみ、復活の周辺であたふたする者たちを描いています。本書は旧約の系図～宣教命令に至るまで、神の計画に対する抵抗史の様です。系図は信仰の父アブラハム～イスラエル最高の王ダビデ～どん底の捕囚と、霊的な流れを意識しつつ、御子を否む勢力への皮肉と信仰の勝利の系譜です。処女降誕～荒野の誘惑～山上の説教～悪霊追放～弟子訓練、そして十字架。律法の新解釈に反感を覚えた権力層は、政治&宗教で敵対する両極を糾合し、群衆をデマで扇動し、十二弟子の一角ユダを誘惑⇒裏切り⇒自殺へ追い込み、御子を孤独と苦痛の極致へ追い詰めるも、父の杯を最期まで飲み干されます。そして埋葬と復活の合間で展開する権力層の協議は、彼らの危機 感の現れで、復活を否むサドカイ派と認めるパリサイ派が、安息日に協力する滑稽さです。

人間は保身のために、倫理観も法的妥当性も敵対心も愛国心も棚に上げて、手を結ぶものです。例えば対テロなどで国内外が利害の一致を見ても、全世界的に一致するとなると、宇宙戦争(?)とか超世界的な危機が必要です。「仮想敵国」を設定し時に戦争という手段も講じて、為政者は権力と富を集め、貧しい者や女性たちの上に胡坐をかく搾取社会システムの、構築に努めます。しかし主の復活は既存のシステムを破壊し、抑圧されている者たちを解放し、権力層は食えなくなる。だから彼らは敵と手を結んでも隠蔽に躍起なのです。逆に言えばそんな笑い話をでっちあげざるを得ないほど、彼らは恐れていた。復活を目撃して大急ぎで墓を離れ、報告に奔走する女性たち と好対照です。そこで御使い以上に目も眩む大金を積み、番兵を偽りの任務に鼓舞しました。

「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから」(4:17)と主イエスは公生涯の初めに宣言しました。天の御国は信者には救い、不信者には仮想敵国です。神は墮落以降、信仰による救いの計画を着々と進め、十字架で完成しました。もはや世も罪も悪魔も信者を滅ぼせず、偽りや金など見えるもので感わしに努めるのがせいぜいです。国内外の世情不安は、御国の完成の近い証拠です。私たちも彼らのように金や名誉や偽りに翻弄され、心を隠蔽していませんか。知的&霊的&感覚的に復活を喜び、新天新地を待ち望みましょう(ガラ 2:20)。

4月23日

「山に登れ」

マタイ 28:16－17

武安 宏樹 牧師

山には人間を魅了する力があります。実際に仏教には比叡山や高野山が、神道に石鎚山や三輪山など山岳信仰があり、山と宗教は密な関係があります。イスラエルでは山は被造物であり、山に香を焚くことは禁じられています。パレスチナ地方は最高峰ヘルモン山はじめ、南北に多く山脈が走っています。山に登ることで、信仰者がどのように主と交わったかを、見たいと思います。

アブラハムは独り子イサクを奉獻せよと主に命じられ、モリヤの山に登り、躊躇せずに刀を振り上げたところ、彼の信仰に脱帽した御使いは制しました。「主の山の上には備えがある」信仰が扉を開き御子奉獻の予表を示す(創 22:)。同じ山で人口調査を悔い改めたダビデは祭壇を、ソロモンは神殿を築きます。旧約の三大契約(アブラハム・シナイ・ダビデ)の全てが、山に関係しています。ノアの箱舟漂流、モーセのカナン遠望、エリヤの霊的戦い、エゼキエルの幻、全て山でした。福音書における主イエスの重要な働きも、山ばかりでした。誘惑・説教・退修・癒し・預言。そして何と言っても変貌山の出来事です(17:)。三聖人の会談に仰天し思わず祠三つ作ると口走ったのは、恐れの結果です。私たちも山籠りして祈ると、恐るべき臨在に恐怖を感じることがあります。けれどもさらに祈ると、主のみ恐れたら良いと気づき、契約を更新できます。修験僧の心境で登るのも良いですが、目的は主との交わりに専念することです。答えを得ても得なくても、奇蹟も見ても見なくても、主を信頼して登ります。

ユダ以外の11弟子は復活の主に呼び出されて、ガリラヤの山に登りました。ガリラヤは主要な弟子が召された地元です。失意のどん底で漁師に戻って、もう一度主に呼び出されて山に登り、顔と顔を合わせて御声を聞いたのです。それは再召命&再献身を促す御言葉です。思い出深い山に主は居られました。皆さんも山に登りませんか。雑念を横に、御声を聞くことに専念しませんか。此処は愛宕山。平日の静かな礼拝堂で、夜を徹して祈るも立派な山籠りです。バイブルキャンプも良いでしょう。山は神でも神社の所在地でもないですが、主と交わって御顔を仰ぎ見るために、素晴らしい被造物ではないでしょうか。

4月30日

「天においても、地においても」

マタイ 28:18

武安 宏樹 牧師

11 弟子は世の権力者の謀を尻目に、山上で主イエスから遺言を受けました。主が天と地に及ぼされる「権威」は、「権力」「権限」「力」「支配」とも訳されます。「反権力」は格好よいですが、知恵 & 人望 & 財力が必要なので簡単ではないし、逆に権力側も生存競争ゆえ、何時失脚するか不安を抱えつつ維持に努めます。共産主義や戦国時代も権力闘争で、宗教改革は体制批判と受け取られました。

福音書の中で主イエスは、権力批判と弱者擁護の反権力の星に見えますが、世の権威に抵抗するのがキリスト者の務めとすれば、それは大きな誤解です。「人はみな、上に立つ権威に従うべき」(ロマ 13:1/ I ペテ 2:13)使徒も口を揃えて、世の政治的 & 宗教的権威が、神によって統治権を委ねられていると証します。それらが絶対的に正しいという意味ではなく、反抗より従順から始まること、納税も律法遵守も大事です。されど私たちは諸権威以上に神を恐れる者です。

主イエスは天と地の権威が択一ではなく、連動することを語られたのです。創造当初は天地一体でしたが墮落で分化し、悪の蔓延が洪水で滅ぼされるも、直後のバベルの塔で権力者が一極集中と格差社会を企て、神は散られます。国家も人種も宗教も言語も多岐に亘れば、平和努力と知恵と信仰が必要です。族長⇒士師⇒王政の各時代に、全地に祝福の管となるべく主の民は証します。神の摂理により世界は保たれ、究極的には信仰と律法の原理で動いています。

されど法や調整機関の整備に拘らず、いつの時代も権力者の横暴は絶えず、偶像礼拝と不法行為に余念がありません。イスラエルさえ例外ではありません。歴史の攻防あれど、天と地の権威を合一し、信仰と律法の原理を全うされた、唯一のお方がイエス・キリストであり、不朽の事実が十字架の死と復活です。この贖いの業により悪魔は、地上の権威を明け渡す時は近しと身震いします。だから主イエスは地上の権威に服しつつ、天の権威ゆえ恐れるなど語ります。

そのしるしは個人的には聖霊の内住、交わりのには「天領」なる教会です。天と地の権威の連動は教会を通して働かれます。聖書と聖霊に反する場合に、御国の鍵を有す私たちは、信仰告白による抵抗権さえ自由に行使するのです。

5月7日

「弟子とせよ」

マタイ 28:19a

武安 宏樹 牧師

① 弟子となる

原文で主動詞「弟子としなさい」に、「行って」「授け」「教えなさい」が分詞で従属しています。つまり宣教命令の目的は、主の身丈まで一生に及びます。十二弟子は人間的な観点では？マークでしたが、主に従う覚悟がありました。家族も財も命も喜んで捧げた彼らは、主の教えではなく人格に献身しました。やがて彼らは大使徒として偉くなりますが、主の前に耳を傾ける弟子でした。「行って」とありますが、師から離れて出て行くのではありません(ヨハ 15:5)。「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」のが主の弟子で、何時何処へも主が同行し、助言し、鼓舞し、幻を見せ、実を与えられます。主イエスは助け主なる聖霊を強調し(ヨハ 16:)、聖霊の内 住が人格的な献身を、赦しを味わい、心の傷や頑なさをいやし、喜びと平安が支配し可能にします。宣教は活動以前に交わりの拡大です。伝道しても聖霊の交わりが乏しければ、実が結ばれなかったり、高慢や卑屈になったり人格のバランスが取れません。御霊の働きはキリスト者の余計な力を抜き、魅力を放ち新しい人を呼びます。

② 弟子とする

だから弟子化とは、私の弟子ではなく主の弟子とし、聖霊の交わりの中におさそいする。それだけでなく、互いに訓練生として共に成長することです。機関車が客車を引っ張るように、自分が知識と現場の指導をするのではなく、機関車は主イエス、客車の一両目が私で、二両目があなたというイメージで、共に引っ張られていきます。引っ張られるという御国まで直行の感ですが、弟子はたくさん失敗もしますから、螺旋状に渦を巻いて成長していきます。聖霊の渦の中に私もあなたも巻き込まれて、スリリングな成長の旅をする。道筋の一步一步は、主との交わりと同じようにコミュニケーションなのです。神は創造の恵みで自由意志を与えました。私が何かを教え込んだりする前に、その人が自分で考えて求めて、恵みに気付くと主の身丈にまで成長します。弟子化の交わりは「あらゆる国の人々を」。聖霊は全世界へ拡がりを示します。その人に可能性を見出し、福音を携え新たな弟子を産む希望を見ましょう。

5月17日

「伝道の基本原則」

マタイ 28:16-20

入川 達夫 師

伝道は神がみことばで命じられている通りにしてゆくところに、大いなる祝福と実りを見る。神が聖書を通して示しておられる伝道の精神について、3つの点から取り上げてみよう。

①「神はキリスト者が未信者のところに出かけて行って福音を伝えるよう命じておられる。」(マルコ16:15他)
神は滅びに向かっている人類を救うためにご自身の方から行動を起こしてくださった。御子イエスはご自身からの世に来てくださり人類の罪のためにいのちを捨ててくださった。ここに神の愛と救いがある。キリスト者は、この福音を伝えるために神から世に遣わされた者である。

②「神は、生ける神の御子イエス・キリストについてだけ語ることを、求めておられる。」(Iコリント1:18他)
伝道における中心的使信は、唯一無比の救い主であるイエス・キリストを伝えることである。特に、救いの中心であるイエスの十字架と復活を伝えることによって聖霊による明確な救いの御業が起こる。キリスト者は臆することなく明確にこの福音を伝える使命がある。

③「神はキリスト者が未信者に主イエスに対する明確な信仰の決断を促すよう求めておられる。」(ロマ10:9、10他)。
人の救いは、神との人格的な関係の回復(信仰の決断)によって起こる。主に向かって信仰の決断をしなければ、その人のうちには何も起こらない。先に救われたキリスト者の役割は、未信者に主イエスに対する信仰の決断を促すことにある。

〔結論〕

伝道には常に霊的な戦いが伴う。聖霊に満たされ、信仰をもって神が聖書で示しておられるこの3つのことをする
なら、自分の奉仕を通して主の祝福を見るであろう。

5月21日

「入門と教育①」

マタイ 28:19b

武安 宏樹 牧師

「キリストの血と霊とによって洗われるとは、どういうことですか？」

「それは、十字架上での犠牲において私たちのために流されたキリストの血のゆえに、恵みによって、神から罪の赦しを得る、ということです。さらに、聖霊によって新しくされ、キリストの一部分として聖別される、ということでもあります。それは私たちが次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩むためです。」(ハイデルベルク信仰問答 70)

① 救いの象徴

私たちは人生の中でキリストとの出会いを経験します。自分の求め以前に、神の選びとキリストの贖いと聖霊の促しが、悔い改めと信仰告白に導きます。もちろん結局は本人の自由意志によりますが、個人的確信では心許ないもの。悪魔はその救いが真実か、家族や就職に支障ないかと、疑念で揺さぶります。そんな時に聖書の御言葉と聖霊の導きに信頼すべきですが、それだけでなく、バプテスマで主と結ばれる儀式から、孤独と罪との戦いに臨在を味わいます。

② 聖化のスタート

救いは身分的には1回で完成でも、性質的には生涯きよめを受け続けます。聖霊の臨在が浄化装置のように、罪深く頑なな私たちの肉に日々勝利を与え、あの時の喜びを追体験します。聖化の軌道の多くは直線的より紆余曲折です。試練における反抗や挫折を通して、何年か経ってから教えられることがある。聖霊の働きは個人的な聖化に留まらず、教会の奉仕に結びつける賜物です。教会は天の植民地、神と人の出会いの場です。そして奉仕訓練の道場です。どうすれば主体的に神と人を愛せるか努力する中で、聖霊が成長を促します。終末に苦難を経て教会は挙げられます。悪魔は獣の印を押そうと躍起ですが、聖霊の印を押された私たちは抵抗し、火と水中を通す戦いに召されるのです。

③ 三位一体の中へ

御名に「よって」は手段を想像しますが、直訳は「中へ(into)」となります。父&子&聖霊なる三位一体の神の交わりに取り込まれて、結合されるのです。終末の戦いは一対一ではなく、世&罪&悪魔が一体になった複合的戦いです。しかし父&子&聖霊なる神が囲い込んで、私たちを守り、全て益とされます。三位一体の交わりの中に在るのが主の弟子です。何か欠けると歪みが出ます。神の摂理&キリストの救い&聖霊のうめきの三視点から、一つの神を崇めて、受けたバプテスマの恵みを覚えつつ、主に結ばれたことを感謝しましょう。

5月28日

「入門と教育②」

マタイ 28:20b

武安 宏樹 牧師

主イエスが弟子たちに命じられた「すべて」は、狭義では福音書全体ですが、旧約律法&預言の再解釈という意味で、広義では旧新約聖書全体と言えます。世の法は条文と判例を頭に入れたら、実務上は大抵の事例に適用できますが、昨今の改憲問題&共謀罪で明らかなように、権力者の恣意で改変も可能です。されど神のことは不変であり、追加&削除する者はさばかれます(黙 22:)。旧新約正典は聖霊の働きにより編纂された点で、人間の法とは異なりますが、聖書全部を記憶&適用しても、律法学者のようでは「すべて、守る」に程遠く、聖なる律法も結局は、人をさばき自分をさばく罪深い法となってしまいます。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして」主を愛する精神が求められます。

一つ目に「すべて」とは何か。ヨハネは福音書末尾で、主イエスの言行録を、全て収めるのは不可能と語りました。他の三福音書&書簡&黙示録も含めて、インクで記された文字を、解釈&黙想&適用して振り返るだけでは足りずに、その彼方に主の臨在を求めることです。教えられたことを実践して教えると、さらに不足を覚えますが、これは不満ではなく飢え渇きで健全なものです。パウロは「文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者」(Ⅱコリ 3:6)と定義して、ヨハネは聖霊が「すべてのことを教え、思い起こさせ」(ヨハ 14:26)と説きます。

二つ目にどのように「守る」か。文字の上だけで守る者に喜びはありません。文字より聖霊を求め主の人格に似せられることを、パリサイ人以上の正義を、これまで主イエスは弟子たちに教え、また彼らの弟子に教えるよう命じます。真理があなたを自由にする世界を知ることなしに、弟子は育てられませんし、文字を権力者が勝手に運用する地上世界にて、霊の戦いを戦えないでしょう。聖書の行間を読む訓練から、世の背後にある存在について解読できるのです。聖書と聖霊の関係は紙一重であり、聖霊単体の強調は教理的逸脱に至ります。私たちは神を求めることにおいて、「多く&深く&広く&豊か」に願うもので、個人的に教會的にも靈的に拡大志向の反面、基本的な本質を見失いがちです。主イエスの提示された「神を愛し、隣人を愛する」(22:35-40)律法二大原則で、私たちは「すべて、守る」だけでなく、単純率直に御言葉に生きられるのです。

6月4日

「世の終わりまでともにいる主」

マタイ 28:20b

武安 宏樹 牧師

ペンテコステ(聖霊降臨日)に、マタイの福音書&大宣教命令の最終節から、ヨハネ福音書も引用し臨在の恵みを学びましょう。「わたしはあなたがたとともにいます」が主文となり、ここに「世の終わりまで、いつも」が修飾します。「わたし&あなたがた」の関係は、罪を犯しても、十字架を前に逃亡するとも、迫害や孤独が襲い来るとも、天に帰ろうとも、いつもいっしょと約束された。師と行動を共にする以前に、「わたしがあなたを選んで共にいるから弟子だ。」これが主の弟子の特殊性なのです。彼らは一時的に主イエスから離されます。「わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない」(ヨハ 13:33)十字架は弟子さえ禁断の領域であり、離された彼らは無様を晒して無力を悟りました。主イエスは常に神と共におられるも(ヨハ 16:32)、人の子として敢えて離され、遺棄の責苦を味わい(27:46)、かくて主は命が、彼らは己の肉が碎かれます。「わたしは、あなたがたとともにいます」主が孤独と別離を葬り去る宣言です。復活の主は弟子たちのため同格の助け主を注がれ、主イエスと父の関係同様、私たちも内住の聖霊を通して、親密な神との交わりに生きることができます。臨在の実は御子が勝ち取られました。聖霊を無視し悲しませてはなりません。

本書の初め「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」は、信仰の系譜が意識され、1章結びはインマヌエル～神は共におられる預言で、旧約族長時代～士師時代～王政時代から御子降誕まで、臨在信仰は継承され、御子昇天後は主イエスが全信者に聖霊を注ぎ、地の果て宣教時代となります。神は人と共に働きたい、それ以前に生きたいと願い、御子を犠牲にしてまで、救いの道を用意し、臨在され、一人でも多くの人に福音を伝えんと願います。聖霊は弟子のしるしです。同時に終末近しと宣教の主の熱心の現れなのです。臆病者ペテロが大胆に、迫害者サウロが倒され回心、ステパノが殉教します。かつて主と離され無力を痛感した弟子たちは、聖霊臨在の力に漲っています。聖霊は御言葉の根から枝なる私たちを精錬しつつ、人格と御業に結実します。皆さんは臨在の確信と実感をお持ちですか。聖会で受けるのは単発の恵みで、感覚よりも主の約束ゆえに臨在を常に信仰によって受け止めると、謙虚さと大胆さが生まれます。「立ちなさい。さあ、ここから行くのです。」(ヨハ 14:31)

6月11日

「生き方としてのキリスト教」

ヤコブ 22:25

入江 告 師

本日の箇所では、鏡に向き合うように御言葉と向き合うということが語られています。最初の 22 節には 21 節からのつながりが想定されます。つまり、たましいを救うことのできる御言葉を受け入れる時、注意しなければならないことがある。それは、御言葉を聞くだけでなく実行するということです。

御言葉を「聞く」だけでは足りず、実行するまではその御言葉の意味を本当に理解することはできない。また、御言葉を聞いても自分のこととして捉えず、自分に語られている御言葉として真剣に受け取らない、そのような状態は、御言葉を本当に理解しているかのように、「自分を欺いて」いるのだ、とされています。

一方で、御言葉を実行しようとがんばっているが実行できない人もいます。クリスチャンとして救われた喜びから始まったのに、いつの間にか苦痛になっていることがある。そんな双方に対して 25 節が語られます。

この 25 節には 2 つの重要な点があります。一つは、「律法を一心に見つめて離れない人は」実行する人になる、ということです。この部分を元の言葉の意味に従って訳し換えると「律法を一心に見つめて、留まり、信じ続ける人は」実行する人になる、となります。

またもう一つは、「律法は自由である」と言われていることです。この世界のルールは本来人間を守るためにあります。神のルール、律法は人間を罪から自由にするものです。私たちは自分で自分を変えることができず、御言葉を実行できません。その上で、主が変えてくださることを求め、御言葉に留まり、信じ続ける者でありたい。御言葉を実行する「生き方」としての信仰を持ちたいと願います。

6月18日

「御言葉をむさぼる」

エレミヤ 15:16

武安 宏樹 牧師

「むさぼる」は新共同訳ですが、第10戒の貪欲禁止規定では隣人の所有物をねたむ不満について記します。けれども第2戒に「ねたむ神」とあるように、聖なる不満もあります。これは主と契約関係にある民との間での不満足です。私たちが主以外の他の神々や事物を愛し、不品行に耽ると主はねたまれます。反対に私たちが恵みの欠如や不公平を感じて求めれば、主は応えられます。憂国の士エレミヤは打たれる南王国に自身を重ねて、光を求めて苦しみます。召された職務ゆえ、他の神々を求めたり、偽預言者を妬んだりはいませんが、自らの咎ではない苦しみから、どうしたら求める活路を見出せるでしょうか。

いやしも平安も得られない中、主は彼を見捨てたのではありませんでした。本書は預言書だから、主がさかんに彼に語り、語らしめる御言葉の洪水です。語らないと鬱になるほど、聖霊のうめきによって御言葉ばかりが圧倒します。さりとて預言ロボットと化した訳でもない。心身共に限界を有する人間です。語れば語るほど目に見える状況は好転どころか、悪化し身の危険を招きます。だから彼の祈りに遠慮がありません(15節)。遠慮している余裕がありません。御手が重すぎると不満をぶつけますが、そこには不信は全く見られません。二人三脚の預言活動で積み上げた信頼関係から、彼は主にすがりつきます。「必ずわたしはあなたを解き放って、しあわせにする」(11節)その約束から、主は厳しさの背後で、いやしと平安に満ちた希望を備えることがわかります。

主は私たちを追い詰める方でしょうか。そのとおりとも違うとも言えます。そのとおりなのは、主が試練を与えるからです。時に理不尽ですらあります。そうではないのは、主が耐えられない試練でなく脱出の道も備えるからです。立ちこめた暗黒の雲の切れ目に青空が見える。そこで御言葉をむさぼります。求めるところ宝が用意されている。それを発掘しながら試練を越えるのです。すると表面的にはいやされないのに、御言葉からいやされた確信が来ます。容易にいやされる痛みなら、求めることもなく、主の苦難も分かりません。しかしそこで御言葉をむさぼり求めると、貪欲の罪も寄せつけないのです。

6月25日

「実を結ぶ木」

エレミヤ 17:5-11

武安 宏樹 牧師

①「主から離れる者～肉に属する者」(5～8節)

エレミヤは正しい者と悪者、信者と不信者などといった、二極構造以前に、自分こそ律法の教えに生きる正しい信者だと、信じて疑わぬ者ほど怪しいと、信仰と不信は紙一重だと考えていました。後の時代のパリサイ人然りです。「心が主から離れる人」とは異教徒ではなく、主と契約関係を結ばれた民です。木でいえば枝としてつながっているが、実質は関係が断絶して栄養が回らず、主から離れなくても、自分の考えや周囲の意見に流されて生きていけると、甘く考える人ではないでしょうか。パウロはコリント教会の信者に対して、未信者と霊的信者と肉的信者の三類型から、自分本位を戒めます(Ⅰコリ 2-3)。信者は身分的には完全に救われた者であり、性質的には聖化の途上ですから、常に霊と肉の葛藤がありますが、「肉に属する人」は、御霊を無視するために、「荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地」恵みの届かぬソドム＆ゴモラの様です。リバイバルに「人間に信頼し、肉を自分の腕」とする自分への絶望が必要です。けれども肉的な南王国も信者も、見捨てず碎かれる主の御手に驚かされます。

②「主が心を探られる」(9～11節)

エレミヤは悔い改めない民の根本原因は、心の土壌だと見抜いていました。「人の心は何よりも陰険で、それは直らない」共同訳は「病んでいる」とします。一時的に悔い改めてもまた戻る。誰が罪深い民の心を修復できるでしょうか。「私をいやしてください。主よ」(14節)傷ついて無力を痛感する者の叫びです。答えは「わたし、主が」人知の及ばぬ深みにまで、全ての民に報いる約束です。天高く蓄積した罪の処理は、主ご自身がいけにえを備えるしか策がなかった。彼は600年後に現れるキリストの贖いを、全身全霊で待ち望み賛美しました。「心」「思い」(10節)は、文語で「心腹」「腎腸」と内臓と精神全体の意に訳します。私たちの心の奥にキリストの贖いが内面化しなければ、絶対に変わりません。捕囚前のエレミヤに見れぬ幻を、捕囚期のエゼキエルは垣間見ます(エゼ 36:)。パウロ曰く「御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ぼされ」(Ⅰコリ 2:)。時至って恵みをいただいた者が、キリストに敵対する岩盤の如き心を碎かれ、御霊の実(ガラ 5:22-23)通年の実(黙 22:2)をつけ、世界に実を結ばせるのです。

7月2日

「陶器師の手の中に①」

エレミヤ 18:6

武安 宏樹 牧師

①「我は土くれ」(創世記2章7節)

「形造る」は原語で陶器師と同じ。「土地」=アダマ、「人」=派生語アダムから、陶器師なる主が土をこね、御自分に似せ、いのちの息を吹き込まれた人間は、他の被造物と一線画した存在です。死ぬことを「土に帰る」(詩 146:4)と言い、世の中や、宇宙や自然との合一を強調するニューエイジ系でも使われますが、聖書の教えは、創造主なる神の御手が土器なる人の生死と霊性を統御します。ヨブは土くれに過ぎぬ者が、陶器師に捨てられたらどうなるかとの恐れから、正当性を主張し追及するも、終に御声から被造物の幸いを悟り悔い改めます。土から造られたのを忘れて己が強くなると、主との交わりが絶え(イザ 29:16)、逆に創造主への感謝と賛美に満ちた柔軟な霊性は、聖霊の働く器となります。

②「主は陶器師」(エレミヤ書18章6節)

陶器師なる主の手は、私たちが救われて以来、いやそれ以前から動かされ、現在進行形で私たちは悔い改めながら、頑なな心を柔かくされるべきです。しかし南王国は我儘な陶器から陶器師が離れ、砕かれて空しさを痛感します。新約時代は陶器師が内住、日々砕かれる経験を味わいます(Ⅱコリ 3:18/5:17)。砕かれる喜びは、陶器師なる主に自分の全てを明け渡した私たちの特権です。再創造された器の方が、ヒビ割れを接着剤で補修して頑張る器よりも美しい。補修補強を重ねた器は価値が落ちるだけでなく、水が漏れます(ルカ 6:36-39)。器は美術品としても良いですが、ぶどう酒を満たして実用に供するものです。「宝」(Ⅱコリ 4:7)=証しの光。パウロは患難の中でも御手により奮起しました。

③「イエスのように」(Ⅰコリント書15章47～49節)

この土の器は地上での証しに役立つだけでなく、天の人のかたちを持つと、地上に生きながら国籍は天に在り、私たちは二重国籍者とパウロは言います。天に上げられる日まで、陶器師なる主が私たちをどのように完成させるのか。それは私たちが地上で主イエスのように生き、その姿に似せられることです。御霊は自己主張から他者奉仕へと導きます(ヒリ 2:6)。器が各地で用いられて、多くの人がいのちの水を飲めるよう、終に「注ぎの供え物」(Ⅱテモ 4:6)となり、主の割かれた肉と血を戴く器として、死&復活人生へと招きます(ヨハ 12:24)。

7月9日

「微笑みの人生」

創世記 26:1-33

蓮井 康人 師

キリスト者の初代と2代目の相違・特徴は何でしょうか。信仰の父と呼ばれる偉大なアブラハムの長男イサク。彼はまた3代目ヤコブのような波乱万丈な生涯とは異なる。イサクの生涯を通して信仰者としての歩み、生き方を学んでみましょう。

① 理不尽な生涯

父親の信仰を見ながら育ったイサクは、神の祝福と恵みに生きることがどれほど幸いであるかを知っていた。モリヤの山で神への犠牲とされた時にはアドナイ・イルエ(主の山に備えあり)を経験し、この飢饉のときには神の御言葉に聞き従うことを通して、その地で100倍の収穫の祝福を受けた。そのためにペリシテ人から理不尽な移住をさせられたが、そこでも父の遺産と神の祝福とが家族と家畜を養った。先の祝福よりもっと広い地が彼の財産となった。イサクの人生には幾度と試練が訪れる度に彼の信仰は磨かれていった。私はその時どうであったか。

② 神がともにおられる生涯

イサクがどこでも祝福に満ちた生活を見たときペリシテのアビメレクは、彼には「神がともにいる」ことを知り、イサクと闘うことに恐れを感じて、和平を結ぼうと接近した。彼は嫉妬からイサクの右の頬を幾度も打ったものである。にもかかわらずイサクは彼と食卓につき、互いに誓いを交わして、彼らを安らかに去らせたのである。私は敵対する者に平安を贈っただろうか。

イエス様はキリスト者として神とともに歩むときの生き方を山上の垂訓で記している。

人は彼を、また私たちキリスト者を、時に「人の良い人、真面目な人」と、呼ぶであろう。実はその生き方こそ安楽な微笑みの生涯を全うする生き方である。主により頼みながらこの素晴らしい生涯を過ごしてまいりましょう。最後にイエス様のことばを読んで終わらしましょう。「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」(マタイ 5:5)

7月16日

「陶器師の手の中に②」

エレミヤ 19:10-13

武安 宏樹 牧師

私たちはキリスト者、日々砕かれ新しく形造られる土として成長します。南王国の民は陶器師の手で形造られるも、不従順で歪み、使えなくなります。硬化した器は砕かれるのみです。このような不信者はどうなるでしょうか。

「陶器師」で思い起こすのは、ユダが主を裏切って銀貨 30 枚得るも後悔して、祭司長たちに返金も突き返され、神殿に投げ込み自殺する場面です(マタ 27:)。 「血の代価」に不吉を感じ善行をと思ったか、陶器師の畑を購入し墓地とした。これは預言書の成就でした(ゼカ 11:/エレ 32:)。 たった銀 30 で御子は砕かれた。その罪意識は未だ処刑前の主に悔い改めを請うこともせず、自暴自棄となり、主が栄光を現される直前に、心頑なに滅びに駆け込む者の哀れな末路でした。「まさかさまに落ち、からだは真二つに裂け、はらわたが全部飛び出して」(使 1:18)二度と修復できない砕きの器を選んだ不信者の、代償は甚大でした。

陶器師から手切れ金で離れようとして、その金は畑の代価として陶器師の手に戻ります。これはバビロン領に陥った畑を買い戻せとの預言の成就です。この畑が外国人墓地となったのは、新しい契約の祝福がイスラエル民族より、異邦人を優先させる契機の暗示でした。ユダの脱落は悲劇であり無残ですが、彼の欠けは誰も想像しなかった異邦人宣教へと、道筋が開かれていくのです。「毒麦」(マタ 13:30)として砕け散るユダと、「一粒の麦」(ヨハ 12:24)として死んで実を結ぶ主イエス。同じ畑の土に帰るも、不名誉な死と名誉ある死が対照的。主の御手は個人的な救いだけでなく、世界的な救いのためにも用いられます。

さばきを告げた民が悔い改めれば思い直し、また祝福を告げた民が頑なに悪を行えば思い直す。心柔らかければ土は整えられて、硬ければ砕かれます。南王国もユダも「自分の計画」(18:11/使 1:25)を優先したのが、原因でした。一見するとペテロよりユダの方が誠実に見えますが、後悔も返金も所詮は、自己中心でした。彼が十二弟子に選ばれたのは、聖書の不思議の一つですが、預言の成就と宣教の進展は、主が歴史と教会を造り替える意味を伺えます。試練はあれど、陶器師が人知を越え自由に働かれることに目を留めましょう。救い主の死を復活に、裏切り者の死を宣教に変える主の御名はほむべきかな。

7月23日

「燃えさかるみことば」

エレミヤ 20:7-18

武安 宏樹 牧師

① 惑わして物笑いにさせる主

エレミヤは、神が自分を惑わして物笑いとあざけりに遭わせたと言います。神にそんな失礼なと思いますが、半ば強引な主の召命に抵抗も許されず(1:)、語るたびに民全てを敵に回して、亡国など起こるのかと非国民だと笑われて、僅かな落ち度もあら探しされて、常に危険と隣り合わせで気が休まらない。語りたくて語っているのではない。語れば何かが変わる希望的観測もない。だから恨み節が出ます(14-18節)。ヨブと酷似しますが彼は個人的事柄です。対するエレミヤは職務的事柄で、ヨブと違って神は叱責せずに彼の恨み節を受け止めていました。つまり物笑いやあざけりに遭うのも御心だったのです。他の人々は気楽に生きているのに、何で自分だけと思う人は喜ぶべきです。「彼は末長く、子孫を見る」(イザ 53:)から苦難は次世代のためだと分かります。恨み節への解答は主イエスの「義のために迫害されている者は幸い」(マタ 5:10)にあります。私たちは主イエスの御姿に希望と慰めを見出すことができます。

② 燃えさかるみことば

語れば語るほど苦しむのに逃げられない理由がある。それは聖霊の力です。この圧倒的な聖霊のうめきこそ、自分の努力以前に主の霊で奉仕する基本で、第一に聖霊が賜物を通して自由に働かれるために、第二に準備をすべきです。私たちは語ることを止めんとするストレスと、御霊の働きのかたべにおいて、神の力が現れるのを見ます。ステパノは素晴らしい不思議と奇蹟を行います。反対勢力は偽証者を立て告発します。しかし彼は旧約史を貫く聖書的説教で、あなたがたこそ律法に違反し、預言者を迫害し、御子を殺したと断罪します。きわめて聖書的で聖霊の恵みにあふれ、恐れや無関心や反感を焼き尽くす、喧嘩説教です。エレミヤは語れど逡巡するも、ステパノは突き抜けています。これこそキリストと聖霊降臨後の恵みです。彼の最期は石を投げられながら、天の御国を展望し、迫害者に勝利宣言し、神に向かってとりなしを祈ります。その殉教で迫害は強まり、使徒たちは全世界に、御言葉の種子が爆発します。これほど物笑いにされながら、神の栄光を現す生き方があったでしょうか。私たちもその立場に召されたら喜び、炎のように天を見据えて語りましょう。

7月30日

「あなたはわたしを愛しますか」

ヨハネ 21:15-19

武安 宏樹 牧師

①「わたしについて来なさい～一度目の召命」

シモン(ペテロ)は漁師で、そのまま続ければ不自由なく生活できました。けれども主イエスは「人間をとる漁師に」とスカウトし、彼は即断即決します。そこに信仰のセンスと、宣教という一大事業を託す主の洞察がありました。神の召命は一方的で、アブラハムもモーセもダビデもエレミヤも同様でした。能力の有無ではなく、少々の難があっても信仰によって従う者が選ばれます。「わたしはあなたとともにいる」(出 3:12)師が弟子と共に居てくださるのが、召命の条件であり、この特権をどれだけ理解しているかが、弟子の真価です。「わたしについて来なさい」「わたしはあなたとともにいる」この2つの言葉が心に刻まれているでしょうか。ここに集う兄弟は神に召され証しする人です。

②「あなたはわたしを愛しますか～二度目の召命」

弟子に試練が訪れます。ペテロは主の苦難を見捨てて逃げてしまいました。破門を悟り力なく元の漁に戻る傷心の中で、復活の主は変わらず共に居ました。一度目の召命を彷彿とさせます。主イエスは人間の苦悩も知っていました。八方塞がりの中でも天の窓は開かれ、私たちの心に座布団二枚が置かれます。私たちもそうですが、己の熱心だけでは奉仕を全うできず碎かれる時があり、渦中は地獄の様ですが、御手に精錬されると以前と違う所から力が沸きます。「あなたはわたしを愛しますか」と、主はあの失態の時と同じく三度尋ねます。脚注通り、主イエスは「一」と二度目は神の愛を表す「アガペー」で尋ねますが、彼は三度とも兄弟愛を表す「フィレオ」で返し、主は三度目に同語で尋ねます。「あなたは最善の兄弟愛で、わたしを愛するのだね？」主は私たちの長兄です。

③「最後の一線～超越した愛」

ペテロは「信仰→徳→知識→自制→忍耐→敬虔→兄弟愛→愛」(Ⅱペテ 1:5-7)と霊的成長の梯子を七段目に兄弟愛、八段目に神の愛を究極の目的とします。最上段は自分の足を上げて届くのではなく、天から聖霊の注ぎで体験します。全八段階踏破した暁に彼は聖人となるどころか、主と同じ殉教に行き着きます。主が私たちを愛して死なれたように、私たちも命をかけた愛に生きるのです。

8月6日

「なぜ伝道するのか」

ヨハネ 3:16-21

入川 達夫 師

何故、わたしたちは伝道するのでしょうか。

I. 人の行く道は二つしかない—いのちか死か

①マタイ7:13-14

私たちが今いる状況は深刻です。多くの人は霊的な死に向かっています。そして、わたしたちが永遠のいのちの道にいるのは決して偶然ではありません。それなのに私たちは周りの人たちに歩調を合わせてしまい、福音の真理からずれてしまっていないのでしょうか。

②ヨハネ3:16-21

ここには「ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つため」と書かれています。イエス様を信じない人は死んでいるか死にかけてします、滅びのただ中にいます(ヨハネ5:12)。イエス様を信じることで滅びから永遠へ変えられます。

II. 人類の救い主は神の御子主イエス・キリストのみ

死からいのちに移されるのはクリスチャンの一大特徴です。

①人の霊的に悲惨な状態—罪と死

自分が信じる前は身の毛がよだつ様な状態だったこと。

②罪と死を打ち滅ぼされた唯一無比のお方を伝える

周りの人々は滅びの中にいます。だからこそ救出の行動を起こすべきです。これこそが隣人愛でもあります。

III. 伝道は愛と召命の問題

①今なお滅びの中にいる隣人たちの叫びとうめきを聞く

救いに選択の余地はありません。

②真の隣人愛は滅びの中にいる親近者たちに救いの手を差し伸べること

自分は今、永遠のいのちにあずかっています。だからこそ周りの人に福音を宣べ伝えるべきです。

IV. まとめ

救いの道は一つしかないことを厳粛に受け止め、緊急性をもってイエス・キリストの福音を宣べ伝えようではないでしょうか？救われる道は1つしかありません。

8月13日

「離れず、捨てない愛」

ヘブル 13:1-6

武安 宏樹 牧師

本章の「兄弟愛」の適用、2～5a節は十戒後半の社会的規定を意識します。そして「離れず、捨てない」神の愛を語る5b節は、その根拠となっています。行い次第で離れたり捨てたりしない神への信頼が、善い行いに実を結びます。

一つ目に、旅人のもてなしは危険な宿の多い当時は大変喜ばれましたが、信者になりすまして、無料の食事付宿泊にありつこうとする輩もありました。徒労に終わると疲れますが、アブラハムやロトが御使いと知らずもてなした。もしかしたら主がこの人を通して何か教えるのではとの、期待感が大事です。二つ目に、獄中信者の配慮は番兵付で枷をはめられ兵士間で川の字に寝て、常識で考えれば不可能な状況で、御使いの先導で脱獄したペテロの記事から、とりなしチームの熱心、祈りと励ましのネットワークが奇跡を生みました。三つ目に、結婚軽視の懸念は自分本位や損得勘定で男女関係を考えるより、創造主が造られた男性と女性とが一つになる奥義として、信仰が必要です。パウロが夫婦論をキリスト論&教会論にたとえたのはそのためです(Ⅰペ°5:)。四つ目に、金銭欲は生育環境で貧困を味わった人ほど執着しがちですが、逆に読めば現状で満足すれば解放されます(Ⅰテモ6:)。金があればあるなりに、なければないなりに、不安がないと言えば嘘になりますが、委ねることです。

以上四つの兄弟愛に共通の必要が、「離れず、捨てない」神の愛なのです。旅人をもてなすのは、私たちもかつて罪の深みから救われたゆえに喜んで、たとえ悪意でも彼の心の空しさを憐れみ、主の愛を伝えようと願うからです。迫害にある人を思いやるのは「喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きい」(マタ 5:12)と、苦難の主が絶賛されるからです。結婚生活がすれ違いの人は、独身者以上の孤独と罪意識を味わっているので、回復のために主が関わってください、霊的ないやしのステップが必要です。金銭に執着する人は、「明日のことは思い煩うな」(マタ 6:34)と信じることです。さらに「離れず、捨てない」と復誦するだけでなく、もっと素晴らしいことは、「主は私の助け手です。私は恐れません」信仰告白で応答&宣言することです。

8月20日

「イエスのまなざし」

ルカ 22:31-34／54-62

井上 慎治 師

十字架にかかる前夜、イエスはペテロがふるいにかけられることを予告し、彼の信仰が無くならないよう取り成したと告げた。ペテロは「死にまで従う」と忠誠を誓ったが、イエスは「きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います」と予告したのであった。

その後イエスは、ゲッセマネで群衆に取り囲まれ、逮捕され、大祭司の家に連行された。ペテロも紛れ込み、中庭で焚き火を囲み、でっち上げの証言により陥れられようとしているイエスの後ろ姿を見つめていた。その場所で、ペテロは三度イエスとの関係を指摘された。恐怖に心を支配されたペテロは、イエスを三度知らないと言って、イエスとの関係のいっさいを否定した。今や「死にまで従う」と言ったペテロの姿はない。

ペテロが言い終わらないうちに鶏が鳴き、その瞬間ペテロの三度の否定のすべてを聞いていたイエスが振り返った。イエスの目と目が合ったペテロは、イエスのことばのすべてを思い出し、外に飛び出して、激しく泣いた。

ペテロの号泣は、決して、先ほどまでの自分自身を哀れむ自己憐憫の涙ではない。イエスの正しさに対する自分の不甲斐なさに対しての涙であった。しかしイエスは、「信仰がなくならないように」と、ペテロの失敗を見越して、ペテロのために祈っていた。イエスの祈りが無かったら、ペテロは、自分が誓った忠誠の言葉と、それを守れず三度もイエスを否定した事実をうやむやにし、言い訳して自分を正当化し、信仰は無くなっていただろう。イエスの祈りがあったからこそ、ペテロは涙することができた。

人は、ペテロのような失敗を必ず犯す存在である。しかしその私のために、イエスは取り成して祈ってくださっている。私たちは、それらしい理由をつけて、イエスの名を否定してしまうことがなかっただろうか。神の栄光は、ペテロが「私は何者でもなかった」と気付かされた時にこそ現われた。私たちの人間的な熱心さ、情熱、努力が全く挫かれ、本性が露わになった時にこそ、神の栄光は現わされる。私を救うために苦しみ、十字架でいのちを捨てた、イエス・キリストのまなざしを忘れてはいけない。

8月27日

「いちじくの実」

エレミヤ 24:1-10

武安 宏樹 牧師

いちじくは「無花果」と書きますが、花が無いのでなく隠頭花序と言って、肥大化した花軸に隠れてたくさんの花が咲き、割ると中身が詰まっています。墮落直後に葉で陰部を覆う記事から、聖書で最初に登場する果実で(創3:7)、禁断の実もりんご説といちじく説があり、古来から身近に愛用されました。本章は短いですが、エレミヤ書のターニングポイントと言うべき重要な章で、南王国は外国の傀儡政権に転落し、降伏したエホヤキンに先に捕囚に引かれ、残留組のゼデキヤ治世は11年続くも、反抗が裏目に出て王国滅亡と捕囚との憂き目に遭います。悲惨な最期ですが、捕囚は主の御心でした(Ⅱ列 24-25)。その捕囚組と残留組の双方に、エレミヤはいちじくにたとえて預言しました。憐れみの御言葉は存続をかけて戦う残留組に対してか。そうではありません。主に見捨てられたと内心忸怩たる思いで、砕かれ心折れた先発組の方でした。

つまり先に捕囚に引かれた者は、人の目に絶望的でも主には良い実であり、バビロンやカルデヤ人相手に踏ん張る者は、勇敢でも主には悪い実であった。人間的に国の存続や神殿の保全で頭がいっぱいですが、主は希望を語ります。残留組から臍抜け&腰抜け&非国民と揶揄される者が、「目をかけ、帰らせ、建て直し、植えて、もう引き抜かない」(6節)恵みの御約束にあずかるのです。彼らには意味不明でしょう。けれども人の目には何も育たぬ不毛の荒野でも、主の目にいばらが抜かれ、石が除かれ、土が耕され、実を結ぼうとしている。捕囚の衝撃を受け罪を認めて主に帰ろうと願う土壤に、主は実を期待します。主イエスは「先の者があとになり、あとの者が先に」(マタ 19:30)と言われます。過去に恵みを受けた誇りはともかく、現在の主との関係はどうかということ。農夫は忍耐深くあれこれ世話し(ヨハ 15:/ルカ 13)、実を結ばなければ切り倒し、枝が離れる空しさを痛感させ植え直し、さらに駄目なら御手が重くなります。エホヤキンは囚人生活 37 年の後、愛顧を受ける記事から主の憐れみを見ます。

いちじくはぶどうと違って外に花は見えず、熟して割れて垣間見えます。今は見えない希望がやがて喜べる時が来ます(詩 126)。帰還は主の恵みです。人に花は見えなくても、主は私たちの内側を見て美味と言われます(雅 2:13)。

9月3日

「罪無き者の血の報い」

エレミヤ 26:12-15

武安 宏樹 牧師

14 節は預言者エレミヤの真骨頂です。語れば権力者に迫害され、語らねば主に打ち碎かれる。祭司や預言者が非難、民が同調、首長たちは日和見です。味方などおらず、語っても語らなくても死ぬなら、生きる希望がありません。だから開き直ったのでしょうか。そうではなく彼が受けた御言葉が支えます。第一に選び(1:5)。天地創造&審判の主が召された職務であるとの確信です。第二に使命(1:10)。彼自身は小さくても、御言葉の力ある業に専心しました。第三に臨在(1:19)。目に見える状況でなく、主と共に戦い勝利する信仰です。

以上3つの確信を土台に、「煮るなり焼くなり好きにせよ」と啖呵を切った。けれどもこれは語るための土台に過ぎず、エレミヤが直面するのは「今」です。父ヨシヤの宗教改革を水泡に帰し、墮落したエホヤキム治世初期のうちに、「主を求めよ。お会いできる間に。」(イザ 55:6)霊の目覆われる前に迫るのです。されど御言葉の剣に「今」の緊迫感で足りず、将来像の提示が必要です(15 節)。神の箱奪われ、祭司エリの馬鹿息子2名殺され、神の栄光去り抜け殻と化す、シロの二の舞になると御名で語る預言は、死罪に値するという訴状の真贋を、かりに私の血を流すなら、そののろいがあなた方にふりかかると絵で示した。この将来像を示すことで、過去の蛮行と自分たちの罪がリンクし目が開かれ、「私たちはわが身に大きなわざわいを招こうとしている」(19 節)と示された。

かくて過去&現在&未来の時間軸と、主&自分&民の三位一体を組み合わせ大胆かつ具体的に語り、結果的に民からも主からも打たれず生き永らえます。私たちも福音を過去の証しや今の恵みだけでなく、将来主が何を成されるか、終末の時代の観点から、再臨&個人的復活&さばき&新天新地を語ることで、脅しではなく聖書的にチャレンジしましょう。一方で預言者ウリヤは何故か、エジプトまで追われて惨殺されます。他に記述なく理由は分析できませんが、主イエスは罪無き者の血の報いについて、激しい口調で語られ(マタ 23:29-36)、彼もそこに含まれると知ります。十字架の贖いは歴代の血ののろいの蓄積で、信じる者は罪ののろいから解放され、主の血に与って自ら流す者となります。

9月10日

「みことばを日常の中に」

ルカ 5:1-11

伊東 勝哉 師

ゲネサレ湖(ガリラヤ湖)の岸辺では、多くの群衆が押し迫るようにして、主のことばを聞いていました(1節)。しかしそんな折ペテロはその群衆から離れて、日常の仕事(網を洗う)をしていました。そこへ、ペテロにとっては非日常であったイエス様が訪れ、彼の舟に乗り、言われました。

「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」(4節)

ガリラヤ湖について知識も経験も豊富な漁師たちが、一晩中働いても何も採れなかったのに…ペテロは主に言いました。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」(5節)

「でもおことばどおり」を直訳すると⇒「しかし、あなたの言葉に基づいて」

昨晚の事実に基づけば、行っても無駄だと思う。しかしペテロは、彼の日常の中に、主の言葉を取り入れました。すると、想定外の結果に…網の許容量オーバーの魚たちがこの時一斉に網の中に入り、二艘の舟が沈みそうになりました。ペテロ達は特別な技術を用いたわけではなく、いつもの舟と網で、変わらない作業をしただけです。一つだけ違っていたことは、主の言葉に基づいて行動したこと。

主は、同様に私たちの日常生活の中に入っていきたいと願っておられます。そして、私たちが、ただ自分の知識・経験・能力だけに頼って歩むのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生かされ、豊かな実を結ぶ者となってほしいと願っておられます。その為に大切なことは、日々、神様と一対一で交わり(聖書の言葉を聴き、そして神に祈る)、それからペテロにとってのガリラヤ湖、日常生活の場である職場、学校、家庭、地域へと出ていくことです。それこそ主が、「人間をとるようになる」と召された信仰者の姿です。

9月17日

「繁栄とは何か」

エレミヤ 29:1-9

武安 宏樹 牧師

本章は偽預言者とエレミヤの対決の点で、27～28章と密な関係があります。捕囚は2年で終わりバビロンは砕かれるとの樂觀論が、枷を砕くショー共々、公然と語られ民の大勢は惑わされますが、預言通りアナニヤは打たれます。捕囚という受け入れがたい結果が御心がどうかは、繁栄理解の神学的問題で、国家と神殿の存続という狭い主題ではなく、天地創造の世界観に関わります。神はご自身のかたちに人を創造され、直後に「生めよ。ふえよ。」文化命令を発しました。人間は神のかたちに造られた栄光を現すため、統治するのです。だから国家で区分される以前に、全地で主の栄光を現すための文化命令です。南王国だけでなく、異国の地でも十字架上でも陰府の底でも栄光は現れます。バビロンでも栄光を現せるように、親&子&孫の三世代 70年間根を下ろして、結果的に彼らは宗教&商業&教育も保障され、予想に反して繁栄しました。

かつて捕囚は終焉であり、アイデンティティ喪失の死亡宣告と考えられて、国と神殿を死守せんために、偶像に頼り偽預言者に聴くことも厭わなかった。神殿が無残に剥ぎ取られ焼き討ちされても、根拠の無い夢を偽預言者は語り、自分たちの世界にこもって満足させ、内向きで自慰的な繁栄で欺きました。しかし捕囚は単なるさばきで終わらず、バビロンでも繁栄を教えられました。アブラハム～モーセの族長たちは、「生めよ。ふえよ。」と語られ旅に出ます。約束の地への荒野の行程は、責められるモーセも従う民も楽ではありません。それでも御言葉に従って旅をする者に、乳と蜜の流れる地は用意されます。プライドを捨てて忍耐を重ねて、一步一步踏みしめる彼方に繁栄があります。原語はシャローム＝平安&平和&健全とも訳せます。罪とは何でしょうか。神への不信によって神のかたちが歪むことです。すると血管が詰まります。主の預言者に聴き従わず、偽預言者を歓迎する腐敗した霊性は末期症状です。バビロンに引かれた民は、神との新しい関係とそこに繁栄があると知ります。モーセ率いる民は荒野の40年で訓練を、捕囚の民は70年で再生を受けました。ペテロは行きたくない所に導かれて、死に様で栄光を現す道を語られました。ヤベツの祈りの如く祝福と地境の拡がり、苦難&訓練と繁栄の実を結ばせ、バビロンの地に民は拡がり、そして今や世界中に福音の種は蒔かれています。

9月24日

「幸いな約束」

エレミヤ 29:10

武安 宏樹 牧師

ソロモンは約 400 年前に神殿奉献の祈りの中で、捕囚を預言しています。最高の神殿と最高の礼拝をもってしても、人の罪をきよめることは出来ない。されどどんなに遠くへ連れ去られても、神の御顔を慕い求めるなら赦される。彼らがもし悔い改めるなら、民全体に赦しの愛が覆うことを願っていました。そのために必要な期間が、バビロンでの 70 年間でした(25:11-12/Ⅱ歴 36:21)。彼ら三世代が異国の地で生活が軌道に乗りつつも、離された痛みを覚えてつ、「あなたのみもとに帰らせてください。私たちは帰りたいのです。」(哀 5:21)その叫びが真剣になった時に、主は帰還の扉を開いて迎えてくださるのです。

私たちは日々悔い改めの祈りを捧げますが、そう簡単に罪の問題を克服が出来ません。けれども捕囚の民が 70 年の時を経て第二神殿の基を打ち込む時、どれほど主の前に好い加減な礼拝を捧げていたか、思い起こしたのでしょうか。老人が大声で泣きました(エズ 3:12)。バビロンや他人のせいにしていたのが、長い時間を経て主の愛が変わらないことを痛感し、ここに戻されたのです。自分から飛び出したので状況は異なりますが、放蕩息子のたとえを思います。帰ってきてわかること。それは父の愛に気づかなかった自分の身勝手さです。父は彼が挫折するのを承知で送り出すも、いつか帰ることを信じていました。

捕囚の民も放蕩息子も裸になって父の愛を求めるのに、歳月が必要でした。私たちの悔い改めは、3分で完了する即席食品のようではないでしょうか。そのような祈りでも聞かれますし、それはそれで赦しの恵みを味わえますが、ソロモンが 400 年の浮き沈みを超えて、父が首を長くして息子の帰還を待ち、乞い求めた愛は、さばきも容赦ない以上に赦しも容赦しなく注がれる愛です。罪の赦しは私たちがどれほど罪を告白するかではなく、神の真実のゆえです。神がどれほど私を愛しているのか。離れた所から帰りたいと願っているのか。砕かれた程度によって私たちは近づけられます。悔い改めは聖霊の働きです。「幸いな約束」＝「あなたがたをこの所に帰らせる恵み」。この所とは何処か。エルサレムの宮であり、父の家であり、私たちの内なる聖霊の臨在の場です。神から離れているのは異常事態です。時空を超えて引き戻すのが神の愛です。

10月1日

「幸いな約束」

エレミヤ書 29:10

武安 宏樹 牧師

ソロモンは約 400 年前に神殿奉献の祈りの中で、捕囚を預言しています。最高の神殿と最高の礼拝をもってしても、人の罪をきよめることは出来ない。されどどんなに遠くへ連れ去られても、神の御顔を慕い求めるなら赦される。彼らがもし悔い改めるなら、民全体に赦しの愛が覆うことを願っていました。そのために必要な期間が、バビロンでの 70 年間でした(25:11-12/Ⅱ歴 36:21)。彼ら三世代が異国の地で生活が軌道に乗りつつも、離された痛みを覚えつつ、「あなたのみもとに帰らせてください。私たちは帰りたいのです。」(哀 5:21)その叫びが真剣になった時に、主は帰還の扉を開いて迎えてくださるのです。

私たちは日々悔い改めの祈りを捧げますが、そう簡単に罪の問題を克服が出来ません。けれども捕囚の民が 70 年の時を経て第二神殿の基を打ち込む時、どれほど主の前に好い加減な礼拝を捧げていたか、思い起こしたのでしょうか。老人が大声で泣きました(エズ 3:12)。バビロンや他人のせいにしていたのが、長い時間を経て主の愛が変わらないことを痛感し、ここに戻されたのです。自分から飛び出したので状況は異なりますが、放蕩息子のたとえを思います。帰ってきてわかること。それは父の愛に気づかなかった自分の身勝手さです。父は彼が挫折するのを承知で送り出すも、いつか帰ることを信じていました。

捕囚の民も放蕩息子も裸になって父の愛を求めるのに、歳月が必要でした。私たちの悔い改めは、3分で完了する即席食品のようではないでしょうか。そのような祈りでも聞かれますし、それはそれで赦しの恵みを味わえますが、ソロモンが 400 年の浮き沈みを超えて、父が首を長くして息子の帰還を待ち、乞い求めた愛は、さばきも容赦ない以上に赦しも容赦しなく注がれる愛です。罪の赦しは私たちがどれほど罪を告白するかではなく、神の真実のゆえです。神がどれほど私を愛しているのか。離れた所から帰りたいと願っているのか。砕かれた程度によって私たちは近づけられます。悔い改めは聖霊の働きです。「幸いな約束」＝「あなたがたをこの所に帰らせる恵み」。この所とは何処か。エルサレムの宮であり、父の家であり、私たちの内なる聖霊の臨在の場です。神から離れているのは異常事態です。時空を超えて引き戻すのが神の愛です。

10月8日

「収穫は多いが、働き人が少ない」

マタイ 9:35 - 10:4

入川 達夫 師

イエスが福音宣教の働きのために12弟子を任命された記事から、イエスの御思いについて学ぼう。

I. 福音宣教の動機(9:35-36)

- 1)イエスのもとに押し寄せる群衆の霊的飢餓状態
 - a)「弱り果てて倒れている」、b)「羊飼いのない羊のよう」
- 2)群衆に向けられるイエスの深いあわれみ「彼らをかわいそうに思われた」
- 3)主イエスは今も同じ視線を滅びゆく世に向けておられる。

II. 福音宣教の理由(9:37-38)

- 1)今は世の終わりの収穫の時である。
- 2)福音宣教は緊急性を有する刈り入れの業である。
- 3)福音が明確に宣べ伝えられている所には大収穫がある。
- 4)人々の求めは大きいのに働き手が圧倒的に足りない。

III. 福音宣教の担い手(10:1-4)

- 1)主の収穫の担い手として選ばれた弟子たち
- 2)主はご自身の栄光の御業のために敢えて「無学のただ人」を選ばれた。
- 3)主の弟子は主イエスが与えられる力によってのみ事をなしうる。

IV. まとめー主の収穫の働きのために

- 1)滅びの中でうめいている同胞に対して主イエスと同じ思いにさせていただこう。
- 2)終末的な緊急性を 覚えつつ収穫(刈り入れ)の業のために祈り励もう。
- 3)自分の身を主の収穫の働きのために献げよう。

10月15日

「キリスト者の相応しい姿勢/その祝福・感謝」

ルカ 17:11-19

鄭 南哲 師

① 恵みを受けている人は多いが、感謝する人は少ない。

10人のツァラート患者はサマリヤとガリラヤ間の町外れに住み(11-13節)、神に呪われたとみなされ、隔離された村で絶望的に死だけを待っていました。そこに主イエスは訪問し憐れみを施すも、サマリヤ人1人が感謝を表します。「この外国人のほかには、だれもいないのか」主イエスも残念がっていました。当時も今も、恵みを受ける人は多くとも、感謝を捧げる人は少ないようです。彼は肉体のみならず霊的救いを受けます。今日から感謝する決心をするなら、その人には神様が備えてくださる、祝福と恵みの明るい未来が待っています。

② 感謝とは何ですか？

1)感謝とは受けた恵みを受けたと表すこと。

感謝とは受けたことを受けたと表す単純なもので、難しくはありませんが、そのような人は多くありません。感謝を表せる人は霊的に訓練された人です。考え(think)から感謝(thank)が引き出されます。両英語の語源は一緒です。感謝は気分的な反応ではなく、意図的に考え記憶する認識と意思の領域です。恵みを受けた初心を忘れない(詩103:)。残る9人にはそれが欠けていました。感謝の原語は夫婦関係を表す語から派生し、心の内面を表すことを求めます。私たちも神様を知り、経験し、神との関係を通して、真の感謝を表すのです。

2)感謝は当たり前だと思わず、ただ神による恵みと受け止める心から始まる。

9人のユダヤ人は恵みの慢心があり、サマリヤ人は異邦人ゆえ謙虚でした。身に余る幸いと思い生きる人に全ては神の恵みです。感謝する人は幸いです。

③ 感謝する人にはどんなことが起きますか？

1)小さいことに感謝することはさらなる神の恵みと祝福を受ける通路になる。

9人は癒して終わりますが、サマリヤ人は救いの確信まで与えられました。

2)感謝を通してさらなる成熟された信仰の人になる。

成熟した信仰者は、不可能な状況を含め、全ての環境で感謝を見出します。

3)感謝する人はさらに神のため用いられる人になります。

感謝で逆境を乗り越える力と、夢を抱き、健康と素晴らしい祝福を受けます。

10月22日

「永遠の愛で建て直す②」

エレミヤ 31:3-6

武安 宏樹 牧師

① 変わる事のない真実な愛(3節)

「永遠＝とこしえ」(Ⅱ歴 5:13)とソロモン神殿奉献に全ての民が賛美するも、以降 400 年の北滅亡＆南捕囚を経て、主の恵みは永遠と言えたのでしょうか。何故このタイミングで「永遠の愛」が語られたのか。それは国や神殿の破滅で、民が信じてきた「愛」「永遠」「誠実」「契約」が、信じられなくなったからでした。転落する最中は聞く耳持たなかったのが、失って初めて惨めさに気づきます。サウルは遺棄されましたが(Ⅰサム 31:)、イスラエルはそれでは終わりません。されど霊性が歪んで愛を正面から受けず、語り方を考えなければなりません。父の愛を子に対してどのように語るべきか。一本調子では馴れてしまいます。逆に信賞必罰では親の顔色を伺う奴隷になるので、精神的成長がありません。「その広さ・長さ・高さ・深さ」(エペ 3:18)を時間かけて伝えるしかありません。主の御手は愛と義が高次で両立します。家を追われて初めて愛に気づきます。不従順に顔を真っ赤に憤るのも、その後に懇々と説き聞かせるのも、愛です。私たちの家庭環境や社会生活の価値観以上に、主の愛を先に示しましょう。

② リセット＆スタート(4～6節)

「あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる」(1:10)とエレミヤは召命時に語られました。主の愛はガチンコ勝負で終わりではなく、新しいイスラエル(＝人生)を建て上げます。サマリヤに金の子牛の都を造る、「姦通の女」(ホセ 3:1)ですが、主の目には未だ真の愛を知らぬ「おとめ」でした。「わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。」愛で再起します。「再び」は三度繰り返し、埃かぶった楽器を手にして神殿での賛美を想起して、ミリアムの如く踊れば臨在に涙し、荒れた偶像の都にぶどう園が再興します。「あなたがたは枝」(ヨハ 15:5)枯れ枝同然から、愛の交わりで豊かな実を結んで、多くの人を潤し、空しい偶像礼拝と不品行に明け暮れる同胞が戻ってきます。神の愛で、主体的な礼拝が喜んで導かれ、隣人の奉仕の実を豊かに結びます。建て直すとは自分だけでなく、他人を無関心から改心させ、社会を変えます。ユダヤ人から異邦人へ、今の時代から後の時代へ、欧米からアジア＆中東へ。永遠の愛に生き、リセット＆スタートの実を結ぶなら、世界は変えられます。

10月29日

「我ここに立つ」

ローマ 3:21-22

武安 宏樹 牧師

1517年10月31日に、ドイツの修道士マルティン・ルターは城教会にて、95箇条提題で免罪符売買(=聖なる商売!)の妥当性の議論を呼びかけ、「地獄の門を閉じ、天国の門を開く」教皇の權威に真っ向から挑みました。議会で撤回を迫られるも、「我ここに立つ」と聖書の根拠外の立証を拒否。帝国追放&拘束された彼は、新約聖書のドイツ語訳に全精力傾注します。

宗教改革の背景には教皇が政治権力に関わり、十字軍で外国を侵略し、金が動き、モラルが乱れ、聖書が形式&伝統&神秘的解釈で歪められ、異端が迫害され、改革運動が潰されながら、大航海時代のグローバル化、ルネサンス、そしてウィクリフ、ヤン・フスら先人の伏線がありました。ルターは修道院や学内で聖書を教えるに留まらず、御言葉に捕えられた。その時に聖書は教会や教皇を介してでなく、直接全ての者が聴くべきと、個人的体験から確信そして宣言へ、聖書を民衆に引きずり下ろしました。

以降キリスト教史的にはピューリタン、合理主義、ペンテコステなど、知的か体験的な流れが発生しますが、必ずしも聖書が受肉されておらず、相変らず解釈は權威者一任で、全人的成長が妨げられてきたと思います。もちろん神学の変遷や教派の秩序を、無視せよと言うのではないですが、頭や体験や組織ありきでは、ルターの如く御言葉に従い「我ここに立つ」、頭⇒心⇒悔い改め⇒救いの喜びへと浸透する、信仰者に程遠いでしょう。各人が聖書に聴き信仰の指針とする「聖書&信仰」、片方だけは駄目です。

どうしたらなれるのか。宗教改革の山並みの向こうに初代教会を望み、ルターがパウロと同じく律法努力に死んで、救いの恵みを信仰によって、受けたことを覚えましょう。努力で決まる救いは、エリートのもので、究極のエリート両名が挫折したのは、信じる者全てが救われるためです。ルターは自分の内面に絶望する「十字架の神学」(ガラ2:20)を提唱します。改革者たちは聖書と信仰を妨げる諸霊と戦い、力と謙遜さを保ちました。私たちはキリストの手紙。聖書信仰は個人⇒世界へのムーブメントです。

11月5日

「新しい契約」

エレミヤ 31:31-34

武安 宏樹 牧師

① 旧約時代の主 & 民の関係性

旧約時代の契約は、アブラハム契約、シナイ契約、ダビデ契約とあります。以上三つは重層的ですが、これらは保険のように他社と比べて結ぶのではなく、神が一方的にお前が必要だから幸いな契約を結ぼうと、意思表示するのです。旧約～新約時代にかけて契約は徐々に進化しながら、更新されていきます。そもそも、なぜ主は民に契約という目に見える形で関係を結んだのでしょうか。創造の初めからアダム & エバが変わること無く、神の御心を行っていれば、心がつながっている以上、加えて契約締結も解除も更新も必要ありません。実の親子に養うのが当然で契約が不要なように、明文化の必要もありません。これが離婚で親子関係が法的に切れると、養育権など契約が必要になります。孤児にならずに経済的に精神的に生きられるように、特別に保護を要します。人は罪を犯し神と隔絶されたので、天から契約として救いの手が伸ばされた。けれどもどうしようもなく守れなかった。これは主の伸ばした手が短いのか。いや咎が仕切りとなり御声が聞こえぬほど、それだけ人の罪が甚大なのです。

② 新約時代の主 & 民の関係性

主の手はたしかに届いていました。結ばれた契約はどれも生きていました。守れないのは民の霊的欠陥です。世の中では契約不履行に罰則が下ります。旧約の民も背信行為ですから、契約解除され訴えられ見捨てられて当然です。そこで神は契約を完全履行する者を処罰し、不履行者の債務を棒引きにした。驚くべき逆転の発想です。責め立てる回収業者も悪魔も手も足も出なくなる。なんとすばらしいことでしょうか。罪人と同じ人の形をした御子を送られた。「これは、契約の血」(出 24:8)新しい契約の言葉は、シナイ契約の引用でした。その血は獣でなく祭司なる御子自ら完全な血で、神と人の隔てを破られます。この契約は探したり努力せずとも、内蔵型ゆえに受け手のサインで有効です。従来は神と人の間に存在した壁が、人が神の側に組み込まれることによって、世と罪と悪魔の手から隔絶されるのです。不完全な契約関係が完全となった。字面でなく御霊の臨在により、心はひねくれても霊はうめきます(エゼ 36:)。御霊は自由に栄光化し(Ⅱコリ 3:)、私たちを喜んで律法を守るように導きます。

11 月 12 日

「土の器に入れた宝」

エレミヤ 32:6-15

武安 宏樹 牧師

卒業式や記念事業でタイムカプセルを埋めますが、湿度の高いわが国では、中身が腐食しがちで、結局取り出すより埋めることに意義を見出すようです。「土の器」ならさらに貧弱ですが、預言的行為として時が流れて実を結びます。ゼデキヤ治世はバビロンに包囲され不安の時代でしたが、気休めを語らないエレミヤは監禁の身でした。預言活動どころか社会生活も制限された状況で、敵軍に占領直前の土地を親類から買うという、耳を疑う預言が与えられます。常識的に考えて無意味ですが、「主のことばのとおり」(8 節)売りに上京した。人知で理解不能な大きな計画について、聖書は奇跡や幻を通して実現します。このことは土地購入以前に帰還預言(30:)の文脈から、事務的な事柄ながら、封印付の本証書と写しに証人まで同席し、公式な取引から証しの目的があり、40 年間に南王国滅亡を語ってきたエレミヤは、この不思議が理解できました。主が語られることは単体ではなく、過去 & 現在 & 未来の文脈で捉える時に、不信仰や誤解から守られます。逆境で語り続けた彼の霊的洞察の賜物でした。

手続き完了後に捧げた祈りは、天地創造～律法～出エジプトはじめ御業とさばきの総括で旧約史を概観し、主の性質と罪深い民の関係に光を当てます。偽預言者は人間的思惑で語りますが、主の預言者は歴史全体 & 聖書全体から、頑なな民をさばきつつも、悔い改めた後に幸いな計画に与らせると語ります。民は霊的に鈍感ですが、自分の土地を失う悲しみと取り戻す喜びに敏感です。だからエレミヤは歴史から主の性質を汲んで、生活感溢れる証しをしました。「証書」と「証し」の関係を思いつつ、タイムカプセルは頑丈でも土の器は脆い。されど証書は「朽ちるけど朽ちない」ゆえに、土の器でよかったのではないか。ヨブは粘土で造られたと、パウロは福音の光を納めるに心許ない人間の器を、それぞれ語り、「外なる人」は朽ちるべき人間、「地上の幕屋」は世界とします。内なる証書は個人的にはキリストの救いの宝と、聖霊による更新を指して、世界的には新天新地です。聖霊は終わりの日の救いの手付金と言われます。「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産」(Ⅰペテ 1:4)です。火の試練で証書が証しになり、器が中身を守るのではなく中身が器を変えます。

11 月 19 日

「悲しみよこんにちは」

ヤコブ 4:9

武安 宏樹 牧師

悲しみと聞いて思いつくのは、親しい人の死や転居による別離や受験失敗、いじめや裏切りなどでしょう。以上を自分から好んで経験する人はいません。内に収縮する悲しみの反対が、満足やうれしさや喜びや楽しさや安心ならば、キリスト者こそ心の底から、「いつも喜んで」(イテサ 5:16)ありたいものです。でもいつも笑っていて、悲しむ人の心の傷口に塩を塗る人はどうでしょうか。私たちは信仰があれば何でも喜ぶべきとの、迷信に取り憑かれていますか。喜びの仮面に悲しみの内面でコントロールしては、喜怒哀楽が病んでいきます。表面的な対症療法で平安は得られませんが、痛々しく取り繕う自我が砕かれ、プライドや恐れや誤った祈りから解放された時に、真の喜びが沸いてきます。

福音書から見るかぎり、主イエスの公生涯に「喜」「楽」の記述は僅少ですが、これは主が常に怒り悲しんでいて、喜び楽しみが無いことを意味しません。むしろ父なる神との交わりを喜び、子どもや婦人や悩める者 & 貧しい者や、とりわけ弟子たちとの交わりを楽しみました。けれども深い所で悲しまれた。それは天の喜びと世の喜びが異なり、神と切り離された人々が創造主を忘れ、自分の願いの実現を喜び弱い者を虐げて笑い、偽りの喜びに生きるからです。「喜び者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣く」キリスト者のあり方は、①互いに一つ心に、②高ぶらず、③低い者に順応、④自分を知者と思わずと、パウロは語ります(ロマ 12:15-16)。取税人と宮に上るパリサイ人は逆でした。されど誰だこんな奴はと思いを巡らせば、それは他でもなく自分ではないか。取税人は自分の罪に対する主の悲しみを知っていました。だからひれ伏した。主はそうのように御前にひれ伏す者の前を、笑いながら通り過ぎるでしょうか。そうではない。他の誰もが笑っても主は共に私たちの罪の苦しみを悲しんで、御名を呼び求める者が救われたことを喜ばれます。つまり悲しみに始まって、主と交わり兄弟互いに仕え合う喜びの奥の間へ、御霊は私たちを導かれます。歪んだ喜怒哀楽が正され、自分の罪だけでなく世の罪の蔓延も悲しみます。「いつも喜んで」の背景に激しい苦闘がありました。「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」悲しみから慰めを受け与える者となります。

11 月 26 日

「わたしを呼べ」

エレミヤ 33:1-3

武安 宏樹 牧師

私たちは日常的に祈りの中で御名を呼びます。無意識に、時にすがりつき、苦しみの中で、罪との戦いで、人の救いを願って、大胆に御前に近づきます。「モーセとアロンは主の祭司の中に、サムエルは御名を呼ぶ者の中にいた。」(詩 99:6)信仰の偉人は絶えず御名を呼びますが、その求め方を学びましょう。

① 創造⇒形成⇒実現の主(2節)

聖書の創造～終末に至るストーリーは、迂回しながら徐々に進展しますが、人はすぐに期待した答が返ることを願い、荒野で不満をぶつけます(民 11:)。だからアブラハムがソドムに、モーセが金の子牛事件に、とりなしたように、祭司役が必要です。何故拳を上げながら民をすぐに滅ぼさないのかといえば、主が一方でとりなしを待っているからです。悔い改めと赦しで民は育ちます。よって三段階でいえば、圧倒的に形成の期間に時間と労力が費やされます。漸(ぜん)進(しん)的聖化は試練に際して主を求めて、恵みに目が開かれながら進行します。広義では人生全体ですが、枝として一つの奉仕など身近な事柄も含まれます。「求めよ、然(さ)らば与へられん」(マタ 7:7)これはキリスト者に対する主の約束で、神の国形成が実現に近い証拠です。最高の叫びは「エリエリレマサバクタニ」、主が苦難の絶頂で迫真の求めをしたように、私たちも求めて御心を悟ります。

② 人知を超えた秘密を語られる主(3節)

求めると何をどのように答えられるか。「あなたの知らない大いなる」事は、今まで見たことも聞いたことも経験したこともない、新しい事柄を示します。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者」(Ⅱコリ 5:17)は時間的でなく質的な新しさで、キリスト者は全く新しく造り変えられた者です。されど主のなさることは青天の霹靂のようで、預言的伏線があります(エゼ 36:)。これは主の目には当然でも、人の目には不思議だから祈りなしに理解不能です。「理解を越えた大いなる」は、イスラエルの民が約束の地を見たのと同じ言葉で、「近づきたい」「隠されている」意。新約でパウロ流に換言すれば奥義でしょう。モーセが接近を禁じられた燃える柴、ヨブが追及を制せられた摂理の 秘密です。主は聖域へ近づくのを禁じるのではなく、謙虚さと大胆さの必要を教えられます。私たちは今やキリストにある秘密の世界へ、御名を呼ぶことで招かれています。

12月3日

「正義の若枝」

エレミヤ書 33:14-16

武安 宏樹 牧師

本書はイザヤ書ほどではないですがメシヤ預言は多く、倒れた木の根元から萌え出る「若枝」は救い主を指しています。南王国末期は偶像礼拝と世に抗えず、ダビデの末裔として力強く伸びるべき樹木が、根から腐った状況にありました。聖書で詩1篇のように成長が木にたとえられます。契約を結ばれた主に信頼し、律法の教えに喜んで耳を傾け、恵まれた信仰に生きるために大事なものは根です。ソロモンの墮落以降に罪の毒素は根から木全体に回って、徐々に枯らせました。この木は主が御自分の民と結んだ契約でしたが、失敗に終わったのでしょうか。地上的にはその通りで、律法遵守に一つでも瑕疵があれば全ての者が不義です。では神は民をさばくのが目的だったのか。人は何かとさばきに目を向けたがり、自分の罪人たるを棚に上げて義人に偽装し、他人を断罪することを是とします。しかし主はさばきで倒すよりも、たくましい若枝の萌芽の希望を第一とします。若枝は植物的に古い木と無関係ですが、端からは木が復活したように見えます。マタイは冒頭の系図にて契約の真実の不変と、人の自己義認の沈黙を迫ります。

以上を主は「いつくしみのことば」・「恵みの約束」(共同訳)・「善言」(文語訳)とよきことば新約的には「福音＝グッドニュース」の原型を思わせる語にて、表現しています。先の系図は人の罪の歴史に屈しない神の救いの成就であり、福音そのものです。十字架の贖いの業績もさることながら、それ以前に御子の誕生自体が福音です。ヨハネの父ザカリヤは旧約最後の預言で、「われらの敵からの救い」(ルカ 1:71)と、表現しています。この「敵」＝「サタン」＝「若枝を摘み取ろうとする者」でしょう。捕囚の彼方の希望に耳を塞いで自己義認に固執させ、荒野で世の栄光で誘惑し、自分の特権のために御子を殺そうと躍起になる、彼らの拠り所は律法遵守です。しかしパウロは律法により罪が生きたことで、分自身に死亡宣告をしました。この死亡宣告は自分だけでなく、律法を悪用して自分を義とし神から遠ざける、サタンへの絶縁状であり、内なるキリストの若枝の誕生日です。キリスト者は、捕囚にもヘロデの男児皆殺しにも全的墮落にも屈せぬ、若枝の支配下にいます。私たちはキリストの訪れを、時の流れを覚えながら深く味わいたいものです。肉が碎かれ霊に生き、隣人から世界へ突き抜けて成長するのが正義の若枝です。

12月10日

「おことば通りこの身になりますように」

ルカ 1:26-3

入川 達夫 師

待降節にちなみ、受胎告知を受け入れたマリヤの主を信じる信仰から学ぼう。

I. マリヤの主に対する絶対的な信仰

マリヤは主の愛を疑うことのない主に対する絶対的な信仰に立っていた。

II. マリヤの幼子のような純粋な信仰

マリヤは主が語りかけられるみことばを混じりけのない純粋な心で受け止めた。

Ⅲ. 主に自分の身を差し出すマリヤの献身と信仰 マリヤは結果を恐れないで、自分の人生を主のみこころの実現のために白紙のまま差し出した。

IV. 私たちもマリヤのような信仰に立とう

① 私たちも主の愛を疑うことのない主に対する絶対的な信仰に立とう。

② 私たちも主が語りかけられるみことばを混じりけのない心で受け止めよう。

③ 私たちも自分の人生を白紙のまま主に差し出して主のみこころの実現のために用いていただこう。

12月17日

「信じきった人」

ルカ 1:39-45

武安 宏樹 牧師

本章は老女エリサベツと処女マリヤの、「あり得ない」妊娠が同時並行的に語られています。前者の子ヨハネは後者の子イエスに半年先に生まれますが、ヨハネ誕生が不能⇒可能の奇跡なら、イエス誕生は無⇒有の創造の奇跡です。そして登場人物が二人の胎児、ザカリヤ & エリサベツ、エリサベツ & マリヤ、最後にマリヤ & ザカリヤの賛美と、それぞれ対になっていることが重要です。

一般的な見方として御使いの告知に対し、ザカリヤの拒否「あり得ない！」とマリヤの質問「どのように？」とが対照されます。理性的に考える男性より、情緒的に受け止める女性の方が、霊的センスが優っていると言えなくもない。大抵の教会において男女比や、夫婦で妻の入信の方が早い傾向に現われます。けれども著者の意図は信仰の優劣でなく、両者共に賛美に結ばれることから、単旋律でなく女声を男声が追って、最後は美しい和声となる複旋律の様です。

このように読み解くと、聖書の教えに男尊女卑も聖職者と平信徒の優劣も、年配者の優位性もない。そもそも何故39～45節が挿入されているのでしょうか。マリヤは喜びを伝えたくてエリサベツのもとへ急ぎ、エリサベツは労苦せず、しかも若くして自分に優る恵みを受けたマリヤの報を、大喜びで迎えました。以上は御言葉の成就や御使いの訪れへの歓喜は勿論ですが、交わりの恵みを、主が個別ではなく二人を引き合わせることによって、体験し合うようにした。「胎内ダンス」はその応答で、後のヨハネ & イエスの信頼関係の序章なのです。

一方ザカリヤは二人の歓声を尻目に、啞者として3ヶ月の謹慎生活ですが、惨めどころか、律法 & 預言者の旧約史と神の摂理を回顧し重要な期間でした。彼は当番祭司の重責から事務的な奉仕となり、主の恵み深さ(=ヨハネ)と、整合に時間がかかった。だからひたすら主に心を向ける時間が必要でした。そんな彼にも二人に劣らず、命名の符合と口の解放の御業が現われました。そして遅れながら賛美の交わりに入れられます。彼は御子の訪れの重大さと、息子の存在意義をかみしめて、三大契約の意義を回想しつつ賛美を捧げます。信仰に早い遅いあれど、異なる恵みが一つになるのが教会の交わりなのです。

12月24日

「忘れないで」

マタイ 1:18-21

武安 宏樹 牧師

キリストは、人間的には父ヨセフと母マリヤの子として生まれましたが、この時は婚約状態に過ぎず、妊娠に必要な男女関係が未だありませんでした。結論から言えば、主はマリヤの胎内に神の霊によって創造されたのですが、ヨセフには青天の霹靂であり、彼女は何をやっていたのかと怪しむでしょう。愛する人を信じられなくなったり、苦悩に突き落とした神に疑念を抱いたり、これから新しい家庭を築くための青写真が、御破算になってしまったのです。そこでどうしたか。律法的には石打ち刑や離縁状を公にして別れられますが、「正しい」=あわれみ深い彼は婚約解消を選び、彼女の名誉を守ろうとします。彼の信仰は、自分の願いが出発点となる御利益信仰や願掛けと全く違います。ヨセフは自分の願いが破れてどのように対応したのか。三つ挙げられます。

一つ目に主は石や銅で造られた物言わぬ神でなく、生きて働かれる神です。目には見えませんが、私たちが恐れに悩まされる時に求めれば答えられます。そのためにキリスト者に与えられている特権が祈りです。彼の熟慮の中には、「主よ何故このようにされたのですか?」との祈りが実質的にあったはずです。願掛けは願って叶うか否かの一往復だけですが、祈りはコミュニケーションですから聖霊が御心の深みへ何往復も果てしなく導き、恐れから解放します。

二つ目に主は御自分の民と愛の契約を結ぶゆえに、災いに見えても幸いな計画が用意されています。人は災難を忌避するが故に、偶像に依り頼みます。けれども主がいつも愛し味方してくれると信じると、偶像が不要になります。この試練を通して既成の価値観や誇りを御破算にして、新しい自分に変わる契機だと信じることができます。そのために心を柔軟にする必要があります。彼は徹底的に熟慮するも、御使いの声を受け入れるための余白がありました。

三つ目に主なる神の御心については、全て聖書の中に公開されています。「ダビデの子ヨセフ」とは、旧約聖書にダビデの子孫から救い主が生まれると、語られている証拠です。主との交わりや聖霊の働きは何でもアリなのでなく、聖書に語られていることの具体的な展開です。彼はたしかにダビデの子孫と、救い主の養親となる御心が符合して、恐れから解放され一歩を踏み出します。彼は祈り&信頼&御言葉の三点で受け止め、御子の父の歩みが始まるのです。

12月31日

「天にも地にも、わたしは満ちている」

エレミヤ 23:24

武安 宏樹 牧師

年間聖句の振り返りです。文脈ではバビロン捕囚の崖っぷちにも関わらず、かたくなで悔い改めぬ民と、彼らの歓迎する気休めを語る偽預言者ばかりで、南ユダは末期症状でした。人間は苦境に陥るほど自己防衛に走るものです。バベルの塔は富と力の散逸を防ぎ、金の子牛はモーセ不在中の秩序を維持し、サウルの礼拝は人心掌握の失敗を恐れ、そのために偶像礼拝にすりしました。この時のサウルの霊性は、神は遠くにいるから呼んでも来ないとの諦めです。近くにいないくても、遠くから全体を見て敵を敗走させる期待感がありません。その反面で霊媒にすぎり、自分次第で神を遠ざけて近づける御都合主義です。「天はわたしの王座、地はわたしの足台」(イザ 66:1)＝「天にも地にも」の解説でただ天を見上げるだけでも、地上を思うだけでもなく、両方を見ることです。私たちの霊的成長とは、「天にも地にも」主が満ち満ちていることの確信です。本章は暗い世情と対照的に、初めてメシヤ預言(30,33)が燦然と登場します。天地創造の救い主が、偽物に満ちた地上に風穴を開けて夜明けと変えていく。天の王座に就きながら、公生涯では地上を御足でくまなく歩き回られました。

私たちは天だけ地だけに神を追いやる御都合主義から、どう脱出できるか。解答は主の祈り「みこころが天で行われるように地でも行われますように。」これをかみしめて祈ることです。このことをハイデルベルク信仰問答では、「自分自身の思いを捨て去り、何一つ言い逆らうことなく聴き従えるように」と解説しますが、天からのロボット人間と化すように見えなくもありません。たしかにキリスト者は、神の御手の内を聖霊の満たしにより歩む者ですから、百歩譲って間違いではないですが、大事なのは聖霊の働きでなすことです。消極的には罪を隠し自分を偽り御都合主義の生き方から、きよめられること。積極的には聖霊によって新しい心、真理を喜ぶ人格が形成されることです。よって天と地をつなぐ者の生き方は、ロボットでなく自分らしい人生です。この祈りのたびに聖霊の支配を霊的に求め、知的に考え、心と体で実行する。そのために地上で与えられた時間と労力を捧げましょう。ゴールは栄化です。ルターはさらに踏み込んで、これを悪の軍勢に対する戦いの祈りと解します。御言葉か死かの選択で、この祈りに全て傾注し悪魔を蹴散らし勝利しました。